7 近世の文学

単元のねらい

◆時間の経過や地域による言葉の変化について理解する。
◆俳諧の修辞や古典を踏まえた表現など、作者の工夫を読み味わう。
◆古跡や伝統行事を調べることを通じて歴史を再発見し、随筆を書く。
・言葉の変化と方言とを結び付けた「田舎に雅言の残れること」を読み、時間の経過や地域による言葉の変化について理解する。
・俳諧や古典を踏まえた表現などを工夫した俳文「おくのほそ道」を読み味わう。
・過去の歴史的な出来事や事跡を調べて得られた「再発見」の内容を、比較的自由にまとめることができる随筆で表現させる。

本単元は古文編最後の単元である。一年間で学習した古典の言葉と現代の言葉とのつながりを理解し、過去の歴史的な出来事や事跡から新しい発見をすることで、自分の言語文化のルーツを知ることをねらいとしている。

単元の構成

「おくのほそ道」より、「旅立ち」「平泉」「種の浜」、「玉勝間」より、「田舎に雅言の残れること」、計四教材を取り上げた。「旅立ち」では、作者の旅に生きる精神を高揚したリズムで綴っている。「平泉」では、自然に対する人為のはかなさを詠嘆している。「種の浜」では、ますほの小貝を拾う行為から、芭蕉の旅への思いを理解することができる。「田舎に雅言の残れること」では、国学者である本居宣長が、地方に昔の言葉が残っている事実について考察している。

「古文の窓６　写本の本文――「青々たり」と「草青みたり」」では、版本と写本の違いを知り、写本では本文が変化することについて、具体例に即して解説している。

「単元の言語活動７　歴史を再発見し、随筆を書く」では、歴史を再発見することの意義、ひいては、古典の作品が現代に至るまで先人達によって伝えられてきたことの意義について、生徒に考えさせる。

近世の文学

教材のねらい

1 選定の理由

近世の文学から「おくのほそ道」三編、「玉勝間」一編を学ぶ。

「おくのほそ道」は古典の紀行文の中でも、日本人にとっての「旅の原型」を形作っているとも言える作品である。芭蕉は、旅と人生を一つと考えており、文学の伝統の中に身を置き、歴史と詩情とが渾然一体となった独自の世界を、俳文らしいリズム感で伝えている。冒頭の「旅立ち」は、死を覚悟して旅に生きようとした芭蕉の気概が表現された名文である。旅を通して、伝統的詩情を求めようとした芭蕉の思いを読み取ることができる。「平泉」では、平泉という歴史的空間に立った芭蕉が、自然の悠久さに対する人為のはかなさを詠嘆している。省略の多い緊迫した文の調べを味わいたい。「種の浜」では、ますほの小貝を拾う行為から、芭蕉の旅への思いを理解することができる。

「田舎に雅言の残れること」は、国学者である本居宣長が、自身の体験から、地方に昔の言葉が残っている事実について考察している。一年間で学習した古典の言葉と現代の言葉がどのようにつながっているかを考えさせることができる。

「単元の言語活動７　歴史を再発見し、随筆を書く」は、関心を持った古跡や伝統行事について調べた経験を随筆にして書かせ、昔の言葉や文化、歴史を学ぶことが自分たちの生きている時代について学ぶことになることを気づかせるねらいとした。

2 指導のねらい

「おくのほそ道」三編では、繰り返し音読することによって、省略や対句、あるいは漢詩文の引用などを多用した、俳文に特徴的な文体に慣れるようにする。必要な所は語句を補ったり、引用された古典を解説するなどして、理解を深めるよう配慮し、文意を正確に読み取るよう指導する。そのうえで、芭蕉がどのような人生観を持ち、「旅」を実践しようとしたのかを理解させたい。芭蕉が訪れたそれぞれの土地に対して、どのような感慨を抱いたのか、文章と発句のかかわりの妙を味わいながら鑑賞させる。

「田舎に雅言の残れること」では、一年間で学習した古典の言葉が現代の言葉がどのようにつながっているかを考えさせ、我が国の言語文化について自分の考えを持たせたい。

「単元の言語活動７　歴史を再発見し、随筆を書く」は、関心を持った古跡や伝統行事について調べた経験を随筆にして書かせることを通して、我が国の言語文化の担い手としての自覚を持たせたい。

3 単元の目標

目標について、別表「単元の目標一覧」をご確認ください。

4 評価規準

学習指導要領との対応等	〔知識・技能〕							
	(1)ア	(1)ウ	(1)エ	(2)ア	(2)イ	(2)ウ	(2)エ	
評価規準例	言葉には、文化の継承、発展、創造を支える働きがあることを理解している。	我が国の言語文化に特徴的な語句の量を増し、それらの文化的背景について理解を深め、語感を磨き語彙を豊かにしている。	文章の意味は、文脈の中で形成されることを理解している。	我が国の言語文化の特質や我が国の文化と外国の文化との関係について理解している。	古典の世界に親しむために、作品や文章の歴史的・文化的背景などを理解している。	古典の世界に親しむために、古典を読むために必要な文語のきまりや、古典特有の表現などについて理解している。	時間の経過による文字や言葉の変化について理解を深め、古典の言葉と現代の言葉とのつながりについて理解している。	時間の経過や地域の文化的特徴などによる文字や言葉の変化について理解を深め、古典の言葉と現代の言葉とのつながりについて理解している。
旅立ち	○	○	○	○		○	○	
平泉	○	○	○	○		○	○	
古文の窓 6					○			
種の浜	○	○	○			○	○	
田舎に雅言の残れること	○	○	○			○		○
単元の言語活動 7	○							
文学と芸能			○		○			

〔思考力・判断力・表現力等〕						〔主体的に学習に取り組む態度〕
A (1) ア	A (1) イ	B (1) ア	B (1) イ	B (1) エ	B (1) オ	
「書くこと」において、自分の知識や体験の中から適切な題材を決め、集めた材料のよさや味わいを吟味して、表現したいことを明確にしている。	「書くこと」において、自分の体験や思いが効果的に伝わるよう、文章の種類、構成、展開や、文体、描写、語句などの表現の仕方を工夫している。	「読むこと」において、文章の種類を踏まえて、内容や構成、展開などについて叙述を基に的確に捉えている。	「読むこと」において、作品や文章に表れているものの見方、感じ方、考え方を捉え、内容を解釈している。	「読むこと」において、作品や文章の成立した背景や他の作品などとの関係を踏まえ、内容の解釈を深めている。	「読むこと」において、作品の内容や解釈を踏まえ、自分のものの見方、感じ方、考え方を深め、我が国の言語文化について自分の考えをもっている。	進んで人生と旅についての作者の考えを理解し、俳諧の修辞や古典を踏まえた表現など、作者の工夫を読み味わい、学習課題に沿って、作者の旅への心情を話し合おうとしている。
		○	○	○		○
		○	○	○		
		○	○	○		
		○	○			
○	○					
				○	○	

進んで芸能作品の歴史的・文化的背景を理解し、学習の見通しをもって、芸能作品への解釈を踏まえ、言語文化について自分の考えを持とうとしている。	○

■言語活動例との関連（【　】は関連する指導要領の言語活動例）

単元の言語活動７　歴史を再発見し、随筆を書く【〔思・判・表〕A(2)ア】

近世の文学

指導計画案

指導上の重点目標

【旅立ち】
1 作者と「おくのほそ道」について概要を理解する。
2 繰り返し音読し、俳文に特徴的な文体になじむ。
3 古典を下敷きにした名文を読み味わう。
4 作者の旅に対する考え方と旅に出る心境を理解する。

学習活動

導入

❶「おくのほそ道」について既習の知識や知っている芭蕉の句をあげる。
❷ 俳諧の歴史・作者・作品について学ぶ。知技

展開

❶「旅立ち」を音読する。思判表
❷ 教師の範読を聞きながら、独特のリズムがどのような表現から生じているか考える。本文から対句表現を探す。知技 →**「言葉と表現」1**
❸ 重要古語の意味・用法を確認する。知技 →**「言葉と表現」2**
❹ 古典の引用に注意しながら現代語訳する。知技 思判表
❺ 季語がもたらす意味合いに気をつけながら、発句を解釈し、作者の心情を理解する。思判表

指導上の留意点

❶「おくのほそ道」から幾つかの句をあげて知っているか聞いてみる。
❷「おくのほそ道」が単に旅の事実を記録したものでなく、作者が旅の文芸として、事実を潤色させて完成したものであることに注意させる。
❶ ゆっくり大きな声で音読させる。
❷ 対句表現がリズムを生み出していること、それぞれの対句がどのように対応しているか押さえさせる。
❸ 教科書巻末の一覧表などを使用し助詞の意味を識別できるよう指導する。
❹ 古典を下敷きにしている箇所は、少し丹念に解説する。特に冒頭では、李白の文章をどのように生かしているか考えさせる。
❺ 文章と発句がどう関わっているか、その妙をつかませる。

【平泉】

1　繰り返し音読し、緊張感のある文体を読み味わう。
2　省略や対句、古典を引用している部分を押さえながら、文章を正確に読み取る。
3　句に表現された作者の心情を理解する。
4　人の営みと自然の営為に対して作者がどのように考えていたか理解する。

まとめと発展	❶作者の旅に対する考えと旅立ちに際しての心境を本文に即してまとめる。思判表 主態 →「学習のポイント」1・「言語活動」1	❶文中の表現から作者が旅に命をかけようとしていたことをつかませる。作者の旅と人生に対する考え方についてどう思うか発表させるのもよい。
展開	❶藤原氏三代の歴史、義経との関わりについて学ぶ。知技 ❷「平泉」を音読をする。思判表 ❸重要古語の意味・用法を確認する。知技 →「言葉と表現」1 ❹省略されている言葉を補いながら、段落ごとに現代語訳する。知技 思判表 ❺杜甫の漢詩「春望」の内容を理解し、そのような古典の引用が作者の心情をどう引き出しているか考える。知技 思判表 ❻「夏草や」「卯の花に」の句に込められた作者の心情を理解する。思判表 →「学習のポイント」1 ❼作者が見た光堂・経堂の情景についてまとめ、時間の推移とともにどのような変化がみられたか話し合う。思判表 ❽「五月雨の」の句に表現された作者の心情を理解する。思判表	❶前の時間に課題として生徒に与えて、発表させてもよい。 ❷歯切れのよい文体がどこから来ているか、考えさせる。 ❸助詞の働きに注意を促す。 ❹平泉の各場所の位置関係、人間関係を押さえさせる。 ❺発展的な学習として「邯鄲の夢」の故事は辞書で生徒に調べさせたい。引用文が本文にそのまま流れ込んでいるので、古典のフレーズが作者の感慨をよりいっそう強めていることを理解させる。 ❻発句が文章とどのように関わっているか、また二つの句はどのように持ち味が違うか、生徒に意見を述べさせてもおもしろい。 ❼❽「曽良旅日記」から実際の旅の様子を紹介し「降り残してや」の表現が意味することを考えさせるとよい。
まとめと発展	❶「夏草や」「卯の花に」の句を詠む際に想起された歴史上の出来事について、それぞれ調べさせる。主態	❶資料集や図書館などを利用して、どのような歴史的な出来事が句の背景にあるのかを理解させ、芭蕉が句に

			込めた思いについて解釈する。
	導入	❶西行や「山家集」と芭蕉との関係、「源氏物語」の概要について学ぶ。知技	❶詩歌編の西行の歌（二六四ページ）なども参考にしながら、芭蕉の発句や紀行文に西行の「山家集」からの影響があることをつかませたい。
【種の浜】 1 種の浜を訪れた作者の感動を理解する。 2 寂しさや」「波の間や」の句を通し、作者が句に凝らした表現の効果への理解を深める。 3 作者が「ますほの小貝」を拾った理由について理解する。	展開	❶「種の浜」を音読する。思判表 ❷作者が種の浜に行った目的について読み取らせる。思判表 ❸「寂しさや」の句に込められた作者の心情を理解する。思判表　→**「学習のポイント」1** ❹「波の間や」の句に込められた表現の工夫、効果について話し合う。知技　→**「言葉と表現」1**	❶情景を味わいながら音読させる。 ❷本文中から該当箇所を指摘させる。 ❸教科書の脚注に示した和歌や「源氏物語」の引用部分を参考に、句が詠まれた背景にある文学作品について理解させる。 ❹句に表れる色彩感覚や情景について想像させ、解釈を深める。
【田舎に雅言の残れること】 1 内容を読み取り、作者の考えを理解させる。	まとめと発展	❶作者が「ますほの小貝」を拾おうとした理由について話し合わせる。主態　→**「言語活動」1**	❶作者にとって「ますほの小貝」拾うことがどのような意味を持つのかを話し合わせることで、作者が「おくのほそ道」の旅の目的について理解を深める。
	展開	❶全文を音読する。思判表 ❷重要古語の意味・用法を確認し、現代語訳する。知技　→**「言葉と表現」1・2** ❸全体を要約し、作者の言う「雅びたる言葉遣ひ」とはどういうものかを考える。思判表　→**「学習のポイント」1**	❶論の展開に注意して、ゆっくり音読させる。 ❷補うところを括弧内に入れさせるなどして、訳はできるだけ正確を期させる。 ❸「見ゆる」などのように、古代の形を残している語を「雅びたる」と言っていることを読み取らせる。

【単元の言語活動７　歴史を再発見し、随筆を書く】

1　古跡や伝統行事についての体験や知識をグループで話し合わせる。
2　生徒たちの話し合いによって、グループで扱う古跡や伝統行事を一つ選び、調べさせる。
3　調査の結果をまとめさせる。
4　調査の結果をもとにして、各自で随筆を書かせる。

❹ なぜ田舎には古語が残っているのか、また、それがどのように新しい言葉に置き換えられていくのかを考える。知技 主態

→「言語活動」1

❹ 都会で使っていることばなどを聞いて、その方が良いと思い古い言葉を捨ててしまうということは、現代日本語でも同様のことが起こっていることを考えさせる。

導入

1 古跡や伝統行事に関する体験談や知識について話し合う。知技

❶ グループを作り、旅行などで古跡を訪れたり、地域の伝統行事に参加したりしたときの体験について話し合う。

❷ 実体験以外にも、古跡や地域の伝統行事について知っている事例があれば、互いに教え合う。

❶ 調べる方法や手段は、生徒の主体性に任せ、インターネットなども活用させ、必ずその資料の正確性や性質を確認させる。
古跡の場合は、その場所で起きた歴史的な出来事や事件、現在の様子について調べる。
伝統行事の場合は、起源、現在までの継承の過程や方法などについて調べる。
古跡の保存や再現、伝統行事の継承事業に関わっている人からの聞き取り調査などを行ってもよい。

❷ 生徒の身近に伝統行事が残っていない場合もあると思われるので、必ずしも実体験にこだわらなくてもよい。

展開

2 古跡や伝統行事を一つ選び、グループで調査する。思判表

❶ グループで話し合った古跡や伝統行事の事例の中から一つを選び、その歴史的背景を調べる。

❷ 調査の成果をまとめる。

❷ 適宜写真なども使い、各自で随筆を書くための資料となるように、客観性を持たせる。

まとめと発展	
3 各自で、随筆を書く。思判表 主態 ❶ 2の調査をもとに下書きをする。 ❷ 推敲する。 ❸ 清書する。 ❹ 完成した文章をグループ内で読み合う。	❶ 調査したことをわかりやすくまとめる。最初から整った文章を書こうとするのではなく、箇条書きから始めてもよい。 なぜそのテーマを選んだのかが分かるように、動機やきっかけを書く。 調査の前と後で、どのように見方が変わったのかなどを書く。 ❷ タイトルを工夫する。読み手の興味を引くような言葉を選ぶ。倒置法、体言止めなどの修辞を用いてもよい。 文章の構成を工夫する。もっとも伝えたいことを文章のどこに配置するのが効果的かを考える。 文体を工夫する。ですます体か、である体か、自分の伝えたいことに合う文体を選ぶ。 ❸ 誤字脱字がないか、文体は一致しているか、確かめる。 全文を通読して、自分の伝えたいことが表現できているか、確かめる。 ❹ 文章表現に関してよかったと感じた点や、内容面について特に関心を持った点などを話し合う。

おくのほそ道

松尾芭蕉

作者

松尾芭蕉

正保元（一六四四）年～元禄七（一六九四）年。名は宗房。俳号は芭蕉、別号は桃青・釣月軒・泊船堂・風羅坊など。祖父の代まで伊賀の国柘植の郷士で、父与左衛門の時代に上野に移り住んだ。二男四女の次男。

▼略歴・業績

若くして藤堂藩伊賀上野付きの侍大将藤堂良精の嫡子良忠に仕えたが寛文六（一六六六）年、良忠が病没したため退身した。良忠は蟬吟と号し北村季吟に従って俳諧を愛好していたので、芭蕉も俳諧に親しんできたが、退身後に諸学を修めるうちに俳諧で身を立てることを志すに至ったようである。寛文十二（一六七三）年、上野の天満宮に最初の撰集「貝おほひ」を奉納し、それを携えて江戸に下り出版した。江戸では小沢卜尺・杉山杉風らの援助で宗匠としての地歩を固めたが、延宝八（一六八〇）年冬に俗を避けて深川六間堀の芭蕉庵に移った。この頃、深川の臨川庵に参禅している。

天和二（一六八二）年の歳末、江戸の大火で芭蕉庵が焼失し、甲州谷村の高山麋時宅に身を寄せ、翌年冬には再建された第二次芭蕉庵に入った。この年に蕉風の発足を示す、宝井其角撰「虚栗」が刊行されている。貞享元（一六八四）年、帰省のための「野ざらし紀行」の旅をしたが、その間、名古屋の連衆と詠んだ「冬の日」五歌仙は、蕉風開眼の記念碑的撰集となった。これ以後、他界するまでの約十年間、一所不住の念をもって旅に生き、そして充実した俳諧活動に明け暮れた。貞享四（一六八七）年八月の常陸鹿島への「鹿島紀行」の旅、十月から貞享五〔一六八八〕＝元禄元）年四月にかけて郷里から吉野、須磨・明石などを訪れた「笈の小文」の旅、貞享五年八月名古屋より木曽路を経て江戸に帰着する「更科紀行」の旅、元禄二（一六八九）年の「おくのほそ道」の旅と、立て続けに旅行をした。引き続いて、伊勢・近江・伊賀・京などに滞在して、「幻住庵記」「嵯峨日記」などを草した。芭蕉の指導のもとに成立した去来・凡兆撰「猿蓑」は元禄四（一六九一）年七月に出版されたが、重厚閑雅な「さび・しをり」の句境を示している。同年冬に江戸に帰り、翌年第三次芭蕉庵に入ったが、元禄七（一六九四）年には西国への旅に出発し、その途中の大坂で病となり、十月十二日に没した。生前の六月に最晩年に追い求めた、枯淡軽快の趣の「軽み」の俳風を見せる野坡ら撰「炭俵」が出版された。こうして芭蕉一門の達成した蕉風俳諧は、「芭蕉七部集」（冬の日・春の日・曠野・ひさご・猿蓑・炭俵・続猿蓑）と総称される代表的撰集七つに集約されている。

出典

▼底本

日本古典文学大系「芭蕉文集」杉浦正一郎・宮本三郎・萩野清校注、昭和三十四（一九五九）年、岩波書店刊）による。特に原文と変えたところはないが、漢字・送り仮名・句読点・読み方などについては、教科書としての統一した体裁に改めた。

▼成立

俳諧紀行。一冊。成立過程は明らかではないが、主に元禄五（一六九二）年から翌六年秋頃までに執筆し、その後も推敲を重ね、元禄七（一六九四）年春までには定稿を得たと推測されている。同年夏には、門人の書家柏木素龍に清書させており、その素龍筆写本は現在まで伝えられている。「おくのほそ道」は元禄十五（一七〇二）年に京都の書肆井筒屋庄兵衛より出版されたが、その底本は素龍筆写本である。現在では、素龍筆写本系統の本文が定稿として、信頼されるに足りるテキストになっている。

▼書名

壺の碑の条に「かの画図にまかせてたどり行けば、おくの細道の山際に十符の菅あり」とある、仙台の東北の道の名を取ったもので、芭蕉はそれを広く奥州路の意に用い、また、たどり行く風雅の細き一筋をも象徴させたのである。

▼内容

芭蕉四十六歳の元禄二（一六八九）年三月に門人河合曽良を伴って千住の宿に第一歩を踏み出し、室の八島・日光・那須・白河の関・須賀川・仙台・塩釜・松島・石巻・平泉・尿前の関・尾花沢・立石寺・最上川・出羽三山・酒田・象潟・鼠の関・市振・金沢・山中・全昌寺・永平寺・福井等を経て、八月下旬美濃大垣に着くまでの足かけ六か月、二四〇〇キロの大旅行の紀行である。

旅の動機についてはいろいろなことが考えられる。例えば、和歌の世界で定着していた歌枕の探訪や、元禄二年が崇拝する西行の五百回忌に当たり、それを記念してというのも動機の一つであろう。さらには古人の心に接しつつ、不易・流行の意味を実感として体得し、悠久な自然とはかない人間の変化の相に思いをいたそうとすることもあったろう。さらにまた作者の人生観・自然観より発する漂泊の思いへの憧れ、新風への意欲、紀行文への意欲などの内面的動機もあったろう。「おくのほそ道」は旅の忠実な記録ではない。昭和十八（一九四三）年に刊行されて話題となった「曽良旅日記」（「奥の細道随行日記」）によって、事実との違いがかなり明らかになり、単なる記憶違いのほかに意識的な省略や事実を前後させるなど潤色の跡が指摘されている。芭蕉は、東北・北陸地方を旅した経験に基づいて、文芸作品としての紀行文を創作したのであって、全体の構想と俳諧紀行であるところの発句との調和とを十分に計算した叙述となっている。特に、構想に関して連句形式の進行の仕方との連関が指摘されており、市振の宿で遊女の一行と同宿した記事などにその最も顕著な例が見られる。なお、紀行に関する芭蕉の見解が「笈の小文」に見えており参考になる。「野ざらし紀行」「笈の小文」などの先行の紀行文に比べて、旅の規模が大きいだけでなく、最も完成された紀行文学として評価が高い。旅を愛するゆえに辺地をさすらうという旅のイメージ、自然への観入と歴史への帰一とが一体化した詩心の在り方など、

旅の文芸を代表する作品であり、後世に多大の影響を与えた。俳人、またはもっと広く、文人の旅の記の範となったばかりでなく、日本人にとっての旅の一つの典型を示すものとなっている。

参考

「笈の小文」の一節に次のように記されている。

抑、道の日記といふものは、紀氏・長明・阿仏の尼の、文をふるひ情を尽してより、余は皆俤似よひて、其糟粕を改る事あたはず。まして浅智短才の筆に及べくもあらず。其日は雨降、昼より晴て、そこに松有、かしこに何と云川流れたりなどいふ事、たれたれもいふべく覚侍れども、黄奇蘇新のたぐひにあらずば云事なかれ。されども其所々の風景心に残り、山館野亭のくるしき愁も且ははなしの種となり、風雲の便りともおもひなして、わすれぬ所々、跡や先やと書集め侍るぞ、猶酔る者の妄語にひとしく、いねる人の譫言するたぐひに見なして、人又妄聴せよ。

参考文献

❖ 教師用

▽注釈書

新編日本古典文学全集「松尾芭蕉集」井本農一他　小学館　平九
新潮日本古典集成「芭蕉文集」富山奏　新潮社　昭五十三
日本古典文学大系「芭蕉文集」杉浦正一郎他　岩波書店　昭三十四
「おくのほそ道大全」楠元六男他　笠間書院　平二十一
「おくのほそ道評釈」尾形仂　角川書店　平十三
「自筆本奥の細道」上野洋三他　岩波書店　平八
「おくのほそ道」久富哲雄　講談社　昭五十五
「詳考奥の細道増訂版」阿部喜三男他　日栄社　昭五十四
「芭蕉おくのほそ道」萩原恭男　岩波書店　昭五十四
古典俳文学大系「芭蕉集」井本農一他　集英社　昭四十五
「校本芭蕉全集」阿部喜三男他　角川書店　昭三十七～四十四

▽入門書・研究案内・辞典

鑑賞日本古典文学「芭蕉」井本農一他　角川書店　昭五十
鑑賞日本の古典「芭蕉集」井本農一　尚学図書　昭五十七
研究資料日本古典文学「連歌・俳諧・狂歌」大曾根章介他編　明治書院　昭五十九
「総合芭蕉事典」栗山理一他　雄山閣出版　昭五十七
「芭蕉はいつから芭蕉になったか」佐藤勝明　NHK出版　平二十四

▽研究書

俳句シリーズ・人と作品「松尾芭蕉」宮本三郎他　桜楓社　昭四十二
別冊国文学「芭蕉必携」尾形仂　学燈社　昭五十五
日本の作家「永遠の旅人松尾芭蕉」白石悌三他　新典社　平三
「芭蕉の本」中村幸彦他　角川書店　昭四十五
「芭蕉物語」白石悌三他　有斐閣　昭五十二
「芭蕉講座」芭蕉講座編集部　有精堂　昭五十七～六十

「芭蕉論」上野洋三　筑摩書房　昭六十一

❀ 生徒用

新潮古典文学アルバム「松尾芭蕉」雲英末雄　新潮社　平二
「新版　おくのほそ道　現代語訳／曽良随行日記付き」（角川ソフィア文庫）頴原退蔵他　KADOKAWA　平十五
「すらすら読める奥の細道」立松和平　講談社　平十六
「芭蕉の表現」上野洋三　岩波書店　平十七
「おくのほそ道」ドナルド・キーン訳　講談社　平十九
「芭蕉」田中善信　中央公論新社　平二十二

図版解説

〈芭蕉行脚図〉

天理大学附属天理図書館蔵。元禄六年（一六九三）作。一幅。紙本淡彩・掛幅装。森川許六筆（一六五六―一七三五）。許六は芭蕉に師事し、画事にも通じた。芭蕉と曽良の旅姿を描く本作は、芭蕉生前の作で、最も信頼のおける画像。⇩ P 99

〈中尾本『おくのほそ道』〉

中尾松泉堂蔵。江戸時代中期より所在不明だった芭蕉自筆『おくのほそ道』草稿本の存在が平成八（一九九六）年に公表され、筆跡から芭蕉の真蹟であることが明らかにされた。⇩ P 105

〈曽良本『おくのほそ道』〉

天理大学附属天理図書館蔵。芭蕉の自筆と考えられている中尾本を、弟子の曽良が移した本である。本書には朱点や訂正が施され、その書き入れを芭蕉自筆とする説もある。⇩ P 105

玉勝間

作者

本居宣長

享保十五（一七三〇）年～享和元（一八〇一）年。初め小津氏、後に本居氏と称した。名は栄貞、幼名は富之助、号は春庵（舜庵とも）など、書斎号は鈴屋。伊勢の国松坂の木綿商人小津定利の長男。宝暦十二（一七六二）年に結婚した妻勝子との間に長男春庭がいる。

松坂の商家に生まれたが、学問や和歌を好み、家業に適せず、医学を志して、宝暦二（一七五二）年から京都に遊学し、同七年に帰郷して医者を開業した。京都遊学中は、医学を堀元厚・武川幸順に学ぶ傍ら、朱子学者で荻生徂徠の古文辞学にも造詣の深い堀景山について儒学を学び、その影響もあって契沖の著書に接し、国学への関心を深めた。帰郷後も国学の研究に励み、同八年に「源氏物語」や「古今和歌集」などの古典の講義を開講、同十三年頃には「紫文要領」「石上私淑言」、さらに歌論の「排蘆小船」などを著した。宝暦十三（一七六三）年には、上方旅行中の賀茂真淵と松坂の宿で面会し、その古代精神究明の学に共鳴して入門、「古事記」の研究を終生の業と定めた。その成果が結実した「古事記伝」全四十四巻の刊行は寛政十（一七九八）年に完了するが、この文字どおりのライフ・ワークとなった研究を通して、国学を体系づけ、大成した。著作は多岐にわたるが、古典文学関係のものに「万葉集玉小琴」「美濃の家づと」「古今集遠鏡」「源氏物語玉の小櫛」など、語学関係に「詞の玉緒」「字音仮字用格」「漢字三音考」や上田秋成との論争をまとめた「呵刈葭」など、歌集に「鈴屋集」、随筆関係に「玉勝間」「うひ山ぶみ」などがある。

出典

▼底本

日本思想大系「本居宣長」（吉川幸次郎他校注、昭和五十三〔一九七八〕年、岩波書店）によった。文化九（一八一二）年刊行の板本によっている。

▼成立

起筆の時期は一の巻最初の章に、「けふはむ月十八日、子の日なれば」と記しているので、寛政五（一七九三）年一月十八日である。寛政七年に第一編が出版され、以後各編を三巻ずつとして寛政九年に第二編、寛政十一年に第三編、文化元（一八〇四）年に第四編、文化九（一八一二）年に第五編が刊行され、この時点で既刊分も含めて五編十五冊が売り出された。第四・五編は宣長没後の出版で、かなり刊行に手間取っている。享和元年に亡くなる前まで、書き継いでいたと考えられる。なお、板本以前の草稿本の存在が指摘されているが、それは寛政元年秋・冬頃の起筆と推定されている。

▼書名

一の巻冒頭に、「言草のすずろにたまる玉かつまつみてこころを野べのすさびに」という宣長の詠んだ和歌が載せられている。書名はこの和歌に由来するもので、「言草が折々にたまる、美しい竹籠」の意である。「万葉集」に用例がある上代語で、いかにも宣長らしい命名なのである。

▼内容

随筆。十四巻および目録。各巻には必ず「初若菜」「桜の落葉」などのように、内容とは無関係に四季の植物にちなんだ巻名が付けられ、巻頭の第一章にそれぞれの巻名の心を詠んだ風雅な歌文を配している。全体は千五章から成り、折に触れて思いつくことを書くという方法なので、その配列に深い意味は見いだせない。その内容は種々雑多であるが、大まかに二つに分類すると、古書からの抄録（「愚管抄」「東鑑」など）、門人などからの聞書（田中道麿・小篠敏など）、古典注釈・古語の語義、地理・歴史の考証などの実証的な研究と見られるものが一群ある。もう一つは評論的姿勢で執筆したもので、古書に関する批評（「宇津保物語」など）、学問論・古書論、折々の随想などであるが、研究と評論とが明快に分けられるわけではなく、両者が絡み合って一章を構成するものもある。

実に範囲が広く、それでいて奥の深い随筆で、宣長の学識の広さと深さを改めて感じさせる。他の著述は領域・方法などがある程度定められているのに比して、そういうものに拘束されない自由さが、学問や信仰・趣味などを対象にさせる原動力になり、本書の価値を一段と高めているのである。しかも、研究の進展した現在においても学問的意義のある説が多く見られる。その中でも、特に自己の学問形成を体験的に書いた章、師の賀茂真淵などについて述べた章、漢意を批判した章などはよく知られている。

文章は平明な擬古文で書かれ、理屈に偏らず、情緒にあふれ、考証・学術的な随筆の代表と呼ぶにふさわしい作品と言えよう。

参考文献

※教師用

▽本文・注釈書・現代語訳

日本古典文学大系「近世文学論集」　中村幸彦　岩波書店　昭四十一

「本居宣長全集」一〇巻・別巻二　大野晋他　筑摩書房　昭四十三〜五十二

日本の思想「本居宣長集」　吉川幸次郎他　筑摩書房　昭四十四

日本の名著「本居宣長」　石川淳他　中央公論社　昭四十五

新潮日本古典集成「本居宣長集」　日野龍夫　新潮社　昭五十八

▽研究書・その他

「本居宣長」　小林秀雄　新潮社　昭五十二

「本居宣長」　吉川幸次郎　筑摩書房　昭五十二

「本居宣長」　城福勇　吉川弘文館　昭五十五

「覚書き日本の思想」　寺田透　岩波書店　昭五十八

「宣長と秋成」　日野龍夫　筑摩書房　昭五十九

岩波セミナーブックス「『源氏物語』入門」　阿部秋生　岩波書店　平四

※生徒用

日本古典文学大系「近世思想文集」家永光郎他　岩波書店　昭四十一
「玉勝間　上・下」（岩波文庫）村岡典嗣校訂　岩波書店　昭六十二
「本居宣長」（新潮文庫）小林秀雄　新潮社　平五
「本居宣長事典」本居宣長記念館編　東京堂出版　平十四
「本居宣長とは誰か」（平凡社新書）子安宣邦　平凡社　平十八
「本居宣長『うひ山ぶみ』」（講談社学術文庫）白石良夫　講談社　平二十二
「本居宣長」（中公新書）田中康二　中央公論新社　平二十六
「やちまた」（中公文庫）田中康二　中央公論新社　平二十七

図版解説　**〈本居宣長〉**

神宮徴古館所蔵。昭和十二（一九三七）年制作。一幅。一五一×一八一センチ。望月春江（一八九三―一九七九）筆。山梨県生。作風は日本伝統的流れに立もので、堅実な写実を基礎とし、琳派や近代的感覚を投入した花卉図等は重厚にしてかつ新鮮な特色を示した。

⇩P99

旅立ち

要旨

人生を旅と観ずる作者は、旅に死んだ古人のことをも思い合わせ、旅への思い断ちがたく、まだ見ぬ土地への憧れも抑えがたい気持ちの中で、旅立ちの準備を調え、庵を人に譲って、杉風の別宅に移った。そして三月二十七日に江戸の春の景色に別れを告げて、千住まで舟に乗り、そこから奥州への長途の旅に出かけた。

構成

段落	ページ・行	段意
第一	初め～P一〇〇・11〈掛け置く。〉	一度去って帰ることのない時の流れは、いわば旅人であり、人生もまた旅と言える。多くの古人が旅に生き旅に死んだ。自分も、一所不住の旅に生きてきたが、しばらくこの草庵に落ち着いていると、白河の関を越えて奥州へ旅に出たいという気持ちにかられた。庵を人に譲って、杉風の別宅に移った。
第二	P一〇一・1〈弥生も〉～終わり	三月二十七日、おぼろにかすむ江戸を旅立った。隅田川を舟で遡り、千住まで親しい人々は見送りに来た。行く春を惜しみつつ人々と別れる悲しみの涙にくれながらも、奥州への一歩を踏み出した。

品詞分解と現代語訳

（表示は略号で示した。略号については略号一覧参照。）

①月日（つきひ）　は　百代（はくたい）　の　過客（くわかく）　に　して、　行（ゆ）きかふ　年（とし）　も　また
係助・提示　格助・体修　断用　接助・単接　八四・体　係助・同類　副

旅人（たびびと）　なり。　②舟（ふね）　の　上（うへ）　に　生涯（しやうがい）　を　浮かべ、　馬（うま）　の　口（くち）
断終　格助・体修　格助・場所　格助・対象　バ下二・用　格助・体修

とらへ　て　老（お）い　を　迎（むか）ふる　者（もの）　は、　日々　旅（たび）　に　して、　旅（たび）
八下二・用　接助・単接　格助・対象　八下二・体　係助・提示　断用　接助・単接

を　栖（すみか）　と　す。　③古人（こじん）　も　多（おほ）く　旅（たび）　に　死せる　あり。
格助・対象　格助・資格　サ変・終　係助・同類　形ク・用　格助・場所　サ変・未　完・体　ラ変・終

④予（よ）　も、　いづれ　の　年（とし）　より　か、　片雲（へんうん）　の　風（かぜ）　に
代　係助・同類　代　格助・体修　格助・起点　係助・疑問　格助・主格　格助・受対

誘（さそ）はれ　て、　漂泊（へうはく）　の　思ひ（おもひ）　やま　ず、　海浜（かいひん）　に　さすらへ、
八四・未　受・用　接助・単接　格助・体修　マ四・未　打用　格助・場所　八下二・用

去年（こぞ）　の　秋、　江上（かうしやう）　の　破屋（はをく）　に　蜘蛛（くも）　の　古巣（ふるす）　を
格助・体修　格助・体修　格助・場所　格助・体修　格助・対象

払（はら）ひ　て、　やや　年（とし）　も　暮（く）れ、　春（はる）　立（た）てる　霞（かすみ）　の　空（そら）
八四・用　接助・単接　副　係助・同類　ラ下二・用　夕四・已　完・体　格助・体修

に　白河の関（しらかはのせき）　越（こ）え　ん　と、　そぞろ神（がみ）　の　物（もの）　に　つき
格助・場所　ヤ下二・未　意・終　格助・引用　格助・主格　格助・対象　カ四・用

て　心（こころ）　を　狂（くる）はせ、　道祖神（だうそじん）　の　招（まね）き　に　あひ　て
接助・単接　格助・対象　八四・未　使・用　格助・体修　格助・対象　八四・用　接助・理由

取（と）る　もの　手（て）　に　つか　ず、　股引（ももひき）　の　破（やぶ）れ　を　つづり、　笠（かさ）
ラ四・体　格助・対象　カ四・未　打用　格助・体修　格助・対象　ラ四・用

①月日は永遠の旅人（のようなもの）であって、来ては去り去っては来る年もまた旅人（のようなもの）である。②舟の上で一生を送ったり、馬のくつわを取って老年を迎えたりする者（船頭や馬子など）は、その日その日が旅であって、旅（そのもの）を自分の栖としている。③昔の（風雅を愛した）人（の中に）もたくさん旅で死んだ人がいる。④自分も、いつの年からか、ちぎれ雲が風に誘われて漂うように、旅に出たいという思いが抑えられず、（最近も須磨・明石などの）海辺を旅し、去年の秋、隅田川のほとりのあばら家に（帰り、）蜘蛛の古巣を払いのけて（落ち着き）、そのうち年も暮れ、春になって霞の立ちこめる空の下で白河の関を越えようと、そぞろ神が取りついて心を物狂おしくさせ、（また、）道祖神の招きにもあって落ち着かず、ももひきの破れを繕い、笠のひもを付け替えて、三里に灸を据える（など旅支度にかかる）とすぐに、松島の月のことが何よりも第一に気にか

の　緒を　付け替へ　て、　三里に　灸　据うる　より、　松島の
格助・体修　ハ下二・用　接助・単接　格助・場所　ワ下二・体　格助・即時　格助・体修

月　まづ　心に　かかり　て、　住める　方は　人に
副　格助・場所　ラ四・用　接助・単接　マ四・已　存・体　係助・区別　格助・対象

譲り、　杉風が　別墅に　移るに、
ラ四・用　格助・体修　格助・帰着　ラ四・体　格助・時間

⑤草の　戸も　住み替はる　代ぞ　雛の　家
格助・体修　係助・同類　ラ四・体　係助・強意　格助・体修

表八句を　庵の　柱に　掛け置く。
格助・対象　格助・体修　格助・帰着　カ四・終

⑥弥生も　末の七日、　あけぼの　の　空朧々と　して、　月は
係助・強意　格助・体修　形動タリ・用　接助・単接

有明にて　光をさまれる　ものから、　富士の峰　かすかに
断・用　接助・単接　ラ四・已　存・体　接助・逆確　形動ナリ・用

見え　て、　上野、谷中の　花の　梢、　また　いつ　かは
ヤ下二・用　接助・単接　格助・体修　格助・体修　副　代　係助・疑問（略）

⑦むつまじき　かぎりは　宵より　集ひ　て、　舟
形シク・体　係助・提示　格助・起点　ハ四・用　接助・単接

と　心細し。
格助・引用　形ク・終

に　乗り　て　送る。　⑧千住と　いふ　所にて　舟を
格助・対象　ラ四・用　接助・単接　ラ四・終　格助・引用　ハ四・体　格助・場所　格助・起点

上がれ　ば、　前途三千里の　思ひ　胸に　ふさがり　て、
ラ四・已　接助・順偶

幻の　ちまたに　離別の　涙を　そそぐ。
格助・体修　格助・場所　格助・体修　格助・対象　ガ四・終

かって、（これまで）住んでいた庵は人に譲り、（とりあえず）杉風の別宅に移るときに、

⑤草の戸も住み替はる代ぞ雛の家と詠み（この句を発句とする）表八句を草庵の柱に掛けて置いた。

⑥三月も（押し詰まった）二十七日、明け方の空がおぼろに霞み、月は有明の月で光がもう薄くなっているものの、（遠くには）富士の峰がかすかに見えて、（近くには）上野、谷中の桜の梢（が見えるが、それ）を、またいつ（見ることができる）かと心細い。⑦親しい人々は残らず前の晩から集まって、舟に（一緒に）乗って送ってくれる。⑧千住という所で舟を上がると、前途三千里の（長旅への）思いに胸がいっぱいになって、夢幻のごとき（この世の中で、会うも別れも不定であるが、それでも親しい人々と別れる分かれ道となった千住の）町で、惜別の涙を流すのだった。

⑨行く　春　や　鳥　啼き　魚　の　目　は　涙
カ四・体　間助・詠嘆　カ四・用　格助・体修　係助・区別

⑩これ　を　矢立　の　初め　と　し　て、　行く　道　なほ　後ろ影　の
代　格助・対象　格助・体修　格助・資格　サ変・用　接助・単接　カ四・体　副　格助・主格

進ま　ず。　⑪人々　は　途中　に　立ち並び　て、
マ四・未　打・終　係助・提示　格助・場所　バ四・用　接助・単接

見ゆる　まで　は　と　見送る　なる　べし。
ヤ下二・体　副助・範囲　係助・区別　格助・引用　ラ四・体　断・体　推・終

⑨行く春や鳥啼き魚の目は涙

⑩この句を旅日記の初めとして（出発したのだが）、行く道はなかなか進まない。⑪人々は途中に立ち並んで、（私の）後ろ姿の見える限りは（見送ろう）と見送っている様子である。

学習活動のポイント

■導入

学習活動のポイント

❶「おくのほそ道」について既習の知識や知っている芭蕉の句をあげる。

❷ 俳諧の歴史・作者・作品について学ぶ。知技(1)ア

❶「おくのほそ道」は中学校で学習しており、芭蕉の名句はさまざまな形で耳にしているだろうから、生徒にもなじみがあろう。「おくのほそ道」から幾つかの句をあげて、知っているか聞いて、興味を喚起したい。

❷「俳諧」とは、室町末期に、おかしみを中心とする「俳諧連歌」であったものが、近世に至り、松永貞徳（貞門派）・西山宗因（談林派）らが独自のジャンルとして定着させた、松尾芭蕉に至って、世俗的な軽みの中に風雅の精神を追求したものである。「古人」に倣い、自分も旅によって歌枕を訪ね、自己の俳諧という文芸を完成させようとしたことなど、「おくのほそ道」を読むうえで大事な事柄を説明する。

「おくのほそ道」は旅の事実を記録したものでなく、作者が旅の文芸として、事実を潤色させて完成したものであることも分かっている。生徒たちにも注意させたい。

【評価】 言葉には、文化の継承、発展、創造を支える働きがあることを理解しているか、確認する。

■展開

学習活動のポイント

❶「旅立ち」を音読する。思判表B(1)ア

❷ 教師の範読を聞きながら、独特のリズムがどのような表現から生じているか考える。本文中から対句表現を探す。知技(1)ウ　→「言葉と表現」1

❸ 重要古語の意味・用法を確認する。知技(2)ウ　→「言葉と表現」2

❹ 古典の引用に注意しながら現代語訳する。知技(1)エ・(2)アエ　思判表B(1)ア

❺ 季語がもたらす意味合いに気をつけながら、発句を解釈し、作者の心情を理解する。思判表B(1)イ

❶❷指名して、ゆっくり大きな声で音読させる。その際、文章のリズムがどのようなところから生じているか考えさせる。それが対句によることに気づかせ、二度目に範読を聞きながら、対

句に傍線を引かせる。

❶【評価】俳文の文体の特徴を踏まえて、内容や構成、展開などについて叙述を基に的確に捉えているか、授業中に指名して音読させることにより、確認する。

❷【評価】我が国の言語文化に特徴的な語句の量を増し、それらの文化的背景について理解を深め、語感を磨き語彙を豊かにしているか、ペーパーテストにより、確認する。

・文章の種類を踏まえて、内容や構成、展開などについて叙述を基に的確に捉えているか、ペーパーテストにより、確認する。

❸動詞の活用を確認し、助動詞とどう接続しているかなど、文法書や教科書巻末の活用表などを使用しながらまとめる。重要古語は辞書で確認させる。「かは」の用法なども調べさせたい。

【評価】古典の世界に親しむために、古典を読むために必要な文語のきまりや、古典特有の表現などについて理解しているか、ペーパーテストにより、確認する。

❹「蜘蛛の古巣」（一〇〇・5）、「股引の破れ」（同・7）などの軽みの表現を使いながら、旅に出る動機を説明していることに気づかせる。古典を下敷きにしている箇所は、少し丹念に解説する。特に冒頭では、李白の文章をどのように生かしているか考えさせる。

【評価】文章の意味は、文脈の中で形成されることを理解しているか、ペーパーテストにより、確認する。

・我が国の言語文化の特質や我が国の文化と外国の文化との関係について理解しているか、授業中の質問により、確認する。

・時間の経過による文字や言葉の変化について理解を深め、古典の言葉と現代の言葉とのつながりについて理解しているか、授業中の質問により、確認する。

❺発句については、季語がもたらす意味合いに気をつけて、本文との関わりを大事にしながら、句に込められた作者の心情をつかませる。惜別の心情は、二つの句にそれぞれどのような観点から表現されているか、意識させる。住んでいる家、めぐり行く春という季節と二つの視点を押さえる。

【評価】季語がもたらす意味合いをつかみ、発句に込められた作者の心情について、作品や文章に表れているものの見方、感じ方、考え方を捉え、内容を解釈しているか、句の鑑賞文を一〇〇字〜二〇〇字程度の鑑賞文にまとめさせ、提出させることにより、確認する。

■まとめと発展

学習活動のポイント

❶作者の旅に対する考えと旅立ちに際しての心境を本文に即してまとめる。思判表B(1)エ 主態

→「学習のポイント」1・「言語活動」1

❶作者が旅に命をかけようとしていたことを、具体的に表す文中の表現を指摘させる。「住める方は人に譲り」（一〇〇・8）

「上野、谷中の花の梢、またいつかは」（一〇一・2）「前途三千里の思ひ」（同・4）などの表現から、作者の心情を考えさせる。また、作者の旅と人生に対する考え方についてどう思うか、何人かの生徒に発表させるのもよい。

【評価】 本文中のどのような表現に作者の気持ちが表れているかについて、作品や文章の成立した背景や他の作品などとの関係を踏まえ、内容の解釈を深めているか、教室で指摘させ、作者の旅に対する心情を五〇字程度の文章にまとめさせることにより、確認する。

・進んで人生と旅についての作者の考えを理解し、俳諧の修辞や古典を踏まえた表現など、作者の工夫を読み味わい、学習課題に沿って、作者の旅への心情を話し合おうとしているか、分析する。

指導上の注意点と発問例

● 一〇〇ページ

問 **「月日は百代の過客にして」（2行目）について、**

(1) この表現は、「人は国の柱なり」と同じ表現技法である。このような表現技法を何と言うか。

(2) 「過客」と同義に用いられている本文中の語を指摘せよ。

(3) この部分を分かりやすく述べると次のようになる。空欄を適切な語で補え。

月日は、（　①　）から（　②　）にかけて（　③　）に（　④　）を続ける（　⑤　）のようなものであって、

(4) この一句と対句になっている表現を本文中から抜き出せ。

答 (1) 比喩（暗喩・隠喩）　(2) 旅人　(3) ①過去　②未来　③永遠　④旅　⑤旅人　(4) 行きかふ年もまた旅人なり

問 **「行きかふ年もまた旅人なり」（2行目）の「年も」とは、何に対して「も」と表現しているのか。**

答 月日

問 **「行きかふ年」は「行き交ふ年」の意である。この意を踏まえて分かりやすく述べた次の文の空欄を適切な語で補いなさい。**

語句の研究

● 一〇〇ページ

2 月日は百代の過客にして　「月日」は、「年月、時間」の意であるが、「月と太陽」の意も込められていよう。「百代」は「長い年月、永遠」の意。李白の文を収める「古文真宝後集」の貞享五（一六八）年刊本や「日本永代蔵」などでは「ハクタイ」と振り仮名があるのでハクタイと読まれているが、パジェスの「日仏辞典」には、「ひやくだい」とあり、必ずしも断定できるわけではない。「過客」は「旅人」の意。

3 古人　西行は建久元（一一九〇）年河内弘川寺に、宗祇は文亀二（一五〇二）年箱根湯本に、李白は宝三年当塗（中国安徽省東部の県）に、杜甫は七七〇年洞庭湖畔に、それぞれ客死したと伝えられている。

4 漂泊の思ひやまず　月日や年など時間が旅をしているように考える芭蕉は、時間の経過によって形成される人生も旅そのものと考えた。そこで、生きている限り、己の人生でも旅を続けたいと思ったのである。定住に安んじる気持ちはなく、一つの旅が終われば、次の旅へと駆り立てられる。ここでも「更科紀行」の旅を終えて半年、旅への衝動はいかんともし難かった。「おくのほそ道」の旅の終点である大垣でも、直ちに伊勢に赴いている。

5 海浜にさすらへ　貞享四（一六八七）年十月下旬から翌五年四月までの間に、尾張・三河・大和・紀伊・摂津・播磨などを旅した折（「笈の小文」の旅）、鳴海・伊良古崎・和歌の浦・須磨・明石などの海浜を歩いたことを述べたものであろう。

5 去年の秋　貞享五（一六八八）年八月末を指す。芭蕉は八月に入って、越人を伴い名古屋を出発、八月十五日の更科の月を賞し、善光寺を経て、下旬に江戸に帰った。これが「更科紀行」の旅である。

5 江上の破屋　「江」は、ここでは「隅田川」。「上」は「ほとり」の意。「破屋」は「あばら家」。隅田川に流れ込む小名木川に近い、今の東京都江東区常盤一丁目三番十二号の地が、芭蕉庵跡と伝えられている。

6 春立てる霞の空に　「立てる」は、「春立てる（春立つ）」（春になる、新年になる）と、「立てる霞（霞立つ）」（立った霞）の掛詞。「春（新年）になって、霞の立ちこめる空」の意。この句の掛かりについては三説ある。

来ては（　①　）、去っては（　②　）年もまた（　③　）と同様に（　④　）のようなものである。
①去り　②来る　③月日　④旅人

問 **答** (1)**「舟の上に生涯を浮かべ」（2行目）、(2)「馬の口とらへて老いを迎ふる者」（3行目）とは、それぞれどのような人か。**
(1)船頭として一生を過ごす人。(2)馬子として馬に旅客や荷物を積んで運びながら老年を迎える人。

問 **答** **「古人も多く旅に死せるあり。」（3行目）という表現に込められた芭蕉の気持ちはどのようなものか。**
人生を旅と考える自分にとって、尊敬する古人同様、旅で死ねれば本望という気持ち。

問 **答** **「誘はれて」（4行目）とあるが、何が誘われたのか。**
片雲。芭蕉の旅心。

補 **答** 文面から言うと片雲であるが、①片雲が風に誘われるように、②片雲が風に誘われるのを見ては（旅心を誘われて…）と二通りに解釈でき、いずれにしても誘われたのは芭蕉の旅心もである。

問 **言外にもう一つ「誘はれ」たものがあるが、それは何か。**
答 (2)作者（芭蕉）の旅心。

問 **「江上の破屋」（5行目）と同じ場所を示し**

①すぐ下の「白河の関越えんと」に掛かるとする説。この場合、「に」を場所を表す格助詞とし、「春になって霞の立ちこめる空の下で白河の関を越えようと」と採る。
②二句おいて、「心を狂はせ」に掛かるとする説。この場合、「に」を原因理由を表す係助詞とし、「春になって霞が立った空を見るにつけて、白河の関を越えたいものだと心を狂わせ」の意となる。③「越えんと」の後に「こころざし」または「思ひ立ち」が省略されており、それに掛かるとする説。この場合、格助詞「に」は場所、原因理由の両方が考えられる。書簡などによると、初めの予定は節句過ぎに出発して三月中に白河を越え、松島に至るはずだったが、余寒が厳しいという白河からの知らせにより、出発を遅らせたとされており、また、この部分が、能因法師の「都をば霞とともに立ちしかど秋風ぞ吹く白河の関」（「後拾遺和歌集」羈旅）という歌を踏まえているとも考えられていることから、ここでは①説に従った。

6 白河の関　昔、蝦夷の警固のため設けられた関所で、常陸の勿来・出羽の念珠と共に奥羽三関の一つとして数えられ、歌枕としても有名。前述の能因法師の歌の他、「たよりあらばいかで都へ告げやらむけふ白河の関は越えぬと」（「拾遺和歌集」別・平兼盛）などの歌がある。

6 そぞろ神の　「そぞろ」を副詞に採り、①「狂はせ」に掛かるとする説、②「つきて」に掛かるとする説がある。副詞説は、「そぞろ神」の確かな用例が芭蕉以前に見られない、「そぞろ」という主観的な語が神という客観的なものに熟合しないという点で出たもの。文章構造からいうと「そぞろ神の」は下の「道祖神の」と対句的表現をなしており、文章の調子からも「そぞろ、神の」と二語に切らないほうがよい。名詞説には、①何となく人の心を落ち着かなくさせる神、心を誘惑する神、②歩行神、あてもなくさまよい出る歩き神、の意の両説がある。ここは名詞説の①に解しておく。

6 物につきて　そぞろ神が「自分に取りついて（何を見ても早く旅に出て行きたい心持ちになる）」。「物」は自分、あるいは身の周りのものを漠然と指す語。「つく」は、「神などが取りつく、乗りうつる」の意。

7 道祖神の招きにあひて　直前の「そぞろ神の物につきて」と対をなす表現。道祖神は

ているのは本文中のどの言葉か、適切なものを次の中から全て選べ。

(ア)住める方　(イ)杉風が別墅　(ウ)草の戸　(エ)雛の家　(オ)庵

問 答 (ア)・(ウ)・(エ)・(オ)

問 **「蜘蛛の古巣を払ひて」（5行目）とは、どのような様子を表現したものか。**

答 長期間留守にしていて、草庵の中が荒れている状態をユーモラスに表している。

補 貞享四（一六八七）年十月に「笈の小文」の旅に出、翌年八月に「更科紀行」の旅に出、草庵を留守にしていた。そして、半年経ってまた旅への思いが湧いてきている。

問 **「蜘蛛の古巣を払ひて」（5行目）とあるが、どうすることを言っているのか。**

答 家の中を掃除して住むこと。

問 **「春立てる霞の空に」（6行目）は、どの語句に続くか。芭蕉が最初三月中に東北に着く予定であったことを踏まえて答えよ。**

答 越えんと

補 芭蕉が実際に白河に着いたのは四月二十日である。「語句の研究」参照。

問 **「立てる」の掛詞的用法について説明せよ。**

答 「春になる」という意の「春立てる」と、「立ち込める霞」という意の「立てる霞」とを掛けている。

問 **「白河の関」（6行目）は能因の歌をはじめとして、古来、歌によく詠まれている。このような地を何と言うか。**

答 歌枕

問 **「白河の関」（6行目）を、目的地の一つとしてあげた理由は何か。**

答 芭蕉の旅は伝統的古典的世界への志向に根ざしており、名所旧跡はその縁（よすが）となるから。

補 歌枕として有名だからという程度の答えしか生徒からは出ないであろうが、能因の歌（語句の研究「春立てる霞の空に」の項参照）などをあげて、芭蕉の旅は、名所旧跡を訪れることが目的の一つであり、古人が作った文化を慕い、伝統的、古典的世界への志向に根ざしたものであること、そしてそれを自らの俳諧に生かそうと考えていたことなどを説明するとよい。

問 **「心を狂はせ」（6行目）とあるが、何が、芭蕉をどのような状態にしたのか。**

答 そぞろ神が取りついて、芭蕉の心を旅に駆り立てた。

補 「予も、いづれの年よりか…漂泊の思ひやまず」などと考え合わせ、旅に駆り立てられる芭蕉の心持ちを十分考えたい。

問 **「草の戸も住み替はる代ぞ雛の家」（10行目）の句意に合うものを次の中から選べ。**

(ア)私のような世捨て人の家も変わってゆくのだなあ。

道の安全を守る神で、道の分岐点などにまつられた。

7 股引　足を通してはき、腰から下を覆う男性用の下着。

8 三里に灸据うるより　「三里」は、膝頭の下で、外側のややくぼんだ所。ここに灸を据えると、健脚になるという。「より」は、「…するとすぐに」の意。

8 松島の月　「松島」は宮城県の松島湾一帯の景勝地。元禄二（一六九）年二月の猿雖（えんすい）宛と思われる芭蕉の書簡に「弥生に至り、待佗候塩竈の桜、松島の朧月、あさかの沼のかつみふくころより北の国にめぐり」とある。この旅の重要な目的地の一つであった。

9 杉風　杉山元雅。通称は鯉屋市兵衛。杉風は俳号。江戸日本橋小田原町の魚問屋で幕府の魚御用を務めていた商人。芭蕉の門人。いわゆる「芭蕉庵」を提供した人物であり、芭蕉に対してさまざまな経済的援助を行った。禅や茶に通じ、画を狩野昌運に学んだ。

9 別墅　別荘。深川六間堀にあった採茶庵をさす。

9 移るに　①移るときにとする説（「に」は時間の格助詞）と、②移ったところ、移ったがとする説（「に」は接続助詞）がある。

(イ)粗末だった家が立派に建て直されたなあ。
(ウ)この草庵には雛人形は似合わないなあ。
(エ)三月の節句だけあって、どこの家もきれいだなあ。

答 (ア)

● 一〇一ページ

問 「弥生も末の七日」（1行目）とあるが、「弥生の末の七日」とどう違うか。

答 一か月を上・中・末に三分したもので、「弥生の末の七日」とすれば、三月二十七日以上の何のニュアンスも含まないが、「弥生も末の七日」とすると、三月も押し詰まったという意が付加されるのである。

補 「弥生も末」と「末の七日」というように、「末」を掛詞的に使っているのである。

問 「光をさまれるものから」（1行目）は、(1)意味上、どの語句に続くか一文節で答えよ。(2)下文にどのように接続するか。

答 (1)見えて　(2)「ものから」は接続助詞で、①逆接（光は薄くなっているものの）、②順接（光は薄くなっているので）、③軽い中止法（光は薄くなっており）の三説がある。ここは①。

補 「おくのほそ道」には、もう一つ「ものから」の使用例があり（末の松山・塩竈の浦）、そこでは②順接の用法である。しかし、典拠となっている「源氏物語」の場合は、逆接で解釈すべきなので、それを踏まえたこの部分も①のように読みたいところである。

問 「またいつかは」（2行目）の後に補うべき語句を示せ。

答 見ん（見ることを得ん）

問 「心細し」（2行目）とあるが、誰が、何を心細く思っているのか。

答 芭蕉が、上野や谷中の桜を今度はいつ見ることができるだろうかと、江戸を離れ、長旅に出ることを心細く思っている。

問 「幻」（4行目）という表現に込められている芭蕉の思いは次のどれか、適切なものを次の中から選べ。

答 (ウ)

問 「ちまた」（4行目）の指し示す場所は、具体的にはどこか。

答 千住

問 「行く春や」（5行目）の句について、季語

この解釈の違いで、次の相違が生ずる。
①後で住む人が娘を持っている人であることを知っていて、雛を飾る様子を想像し、移るに際してこの句を作り、表八句を、芭蕉庵の柱に掛けた。
②移った後、芭蕉庵の辺りを訪れて、雛の飾られているのを見て「草の戸」の句を作り、表八句を、採茶庵の柱に掛けた。

ここでは、①説に従った。

10 草の戸も住み替はる代ぞ雛の家　季語は「雛」で季節は春（陰暦三月三日）。「独りわびしく住んでいた草庵も住み替わるときがきた。世捨て人の自分と違って今度は妻も子もある人が住むことになるので、雛祭りには、世間並みに雛人形が飾られた家となることだろう」の意。この句の中心は「住み替はる代ぞ」という芭蕉の心境であり、「草の戸」と「雛の家」という対照的なものによってそれはさらに深められている。常に移り変わる世の中を表現した句でもあり、冒頭文とも響き合う。芭蕉庵に住み替わった人が俗人だったことについては、真蹟短冊の前書きに「むすめ持たる人に草庵をゆづりて」とあることや、「世中百韻（よのなかひゃくいん）」所収のこの句の前書きに、「はるけき旅の

と季節を示せ。

問 **「行く春」の表現には、二つの思いが重ねられている。箇条書きで説明せよ。**

答 季語＝行く春　季節＝春

①過ぎ行く春を惜しむ思い。②住み慣れた江戸を出て、親しい人々とも別れて旅立つ、晩春の離別の思い。

問 **「鳥」や「魚」（5行目）が、鳴いたり涙したりする直接の理由は何か、簡潔に説明せよ。**

答 過ぎ行く春を惜しむため。

問 **「行く道なほ進まず。」（6行目）とあるが、なぜか。**

答 念願の旅立ちではあったが、親しい人々との別れは悲しく、後ろ髪を引かれる思いだったから。

補 旅に憧れる気持ちは強いが死をも覚悟しての大旅行なので親しい人々と二度と会えないことを思うと後ろ髪が引かれるのである。

問 **「後ろ影の見ゆるまでは」（6行目）の後に補うべき語句を答えよ。**

答 見送らん

問 **芭蕉は、旅に出ようとする動機をどのように述べているか、まとめよ。**

答 草庵に落ち着いてみると、居ても立ってもいられなくなるような旅への思いに駆られ、白河の関を越えて遠く奥羽の地を訪ね、名

空思ひやるにも…日比住ける庵を相知れる人に譲りて出でぬ。この人なむ妻を具し娘孫など持てる人なりければ」とあることでも分かる。

11表八句　五十韻（五十句一続きの連句）、または百韻（百句一続きの連句）を書く場合、一枚の懐紙を細長く二つに折って、五十韻は二枚、百韻は四枚を使用、それぞれ四面または八面に書きつけるが、第一枚を初折（しょおり）といい、初折の表に書く八句を表八句という。なお、五十韻は、二・三・四面に十四句ずつ、百韻は、二・三…六・七面にそれぞれ十四句ずつ、第八面に八句書く。歌仙（三十六句一続きの連句）は、六句、十二句、十二句、六句と四面に書く。

11柱に掛け置く　句を書いた懐紙は、水引きで綴じて、柱に掛けるのが普通である。

●一〇二ページ

1月は有明にて　陰暦十六夜以降、月が明け方の空に白く残っていること。また、その月。

2上野、谷中の花　「上野、谷中」は、共に現在の東京都台東区内の地で、桜の名所。元禄二（一六八九）年は一月に閏月があり、三月二十七日は陽暦の五月十六日になるので、桜の花が咲いているはずもない。ここは実景ではなく、観念の世界の桜花のことで、上野・谷中辺りの森を眺めて、見慣れたあの桜花を再び見ることがあるだろうかと心中に思ったのである。

3千住　現在の東京都足立区内の地。奥州街道の最初の宿駅。江戸四宿の一つ（他の三つの宿駅は板橋・内藤新宿・品川）。

3舟を上がれば　深川から千住まで、舟で隅田川を遡上した。

4前途三千里の思ひ　「三千里」は「三千里外遠行人」（「白氏文集」）などのように、漢詩で使われる語で、中国から胡地へ赴く遠い距離をいう。日本の古典でも「東関紀行（とうかんきこう）」の「李陵が胡に入りし三千里の道のおもひ、身にしらるる心地す」などの例があり、辺境遠隔の地への旅の思いを述べる慣用語となっていた。

4幻のちまた　「幻」は、「この世は無常で、夢幻のごとくはかないもの」の意。「ちまた」は、「道の分かれる所」の意と、「街路、町通り」の意とを兼ねる。ここは、「夢幻のごときこの世の中で、会うも別れるも不定であるが、それでも親しい人々との別れは悲しく、いよいよ別れる分かれ道となっ

勝松島の月なども賞でたいものという気持ちで旅に出た。

問 **「草の戸も」（10行目）の句で、「雛の家」から連想される新しい住人のイメージを、芭蕉の生き方と比較して答えよ。**

答 芭蕉が世捨て人として孤独に生きているのに対して、新しい住人は妻も娘もいて、雛祭りには世間並みに雛人形を飾るといった平和な生き方が想像される。

た千住の町で涙を流すことだ」の意。

5行く春や鳥啼き魚の目は涙　季語は「行く春」で季節は春。切れ字は「や」。「過ぎ行く春を惜しんで空行く鳥は悲しげに鳴き、水に遊ぶ魚も目に涙を浮かべているようである。その季節に私もまた、親しい人々との別れを惜しみつつ旅立って行くのである」の意。古来、和歌の世界で詠まれた、過ぎ行く春を惜しむ惜春の情を前面に出し、その背後に親しい人々との別れを惜しむ惜別の情がほの見える句であり、「行く春」と「鳥啼き魚の目は涙」の取り合わせは新鮮で美しい。陶淵明の「帰ニ田園居一」の「羈鳥恋ニ旧林一、池魚思ニ故淵一」や、杜甫の「春望」の「感レ時花濺レ涙、恨レ別鳥驚レ心」（一五二）などの漢詩が影響を与えているという指摘がある。なお、旅の終わりである大垣に「蛤のふたみにわかれ行く秋ぞ」の句が結びの句として置かれており、「行く春」と「行く秋」とが照応している。

6矢立の初めとして　矢立（携帯用の筆と硯を入れるもの）を使う最初の機会として。旅日記の書き出しとして。

旅立ちの前段で、芭蕉は旅に対する考えを、つまり人生観を語り、抑えきれぬ旅への憧れと旅先への期待を吐露することで、旅立つ前の心境を述べている。こうした内容を「月日は百代の過客にして…」と中国の李白の文を下敷きにした、文学的修辞に勝った文章で書き出しており、歌人や連歌師の紀行を意識しながら、俳文による新しい紀行を執筆するという意気込みを感じざるを得ない。

この旅について、「今年の旅は、やつしやつして薦かぶるべき心掛けにて御座候ふ。」（元禄二〔一六八九〕年二月頃、猿雖宛書簡）と芭蕉自ら述べているように、物乞いをしても旅を続けるという決意のほどがよく出ているが、無常の世の中、死をも覚悟していたのである。それは後段にある、「上野、谷中の花の梢、またいつ見むと、かねて心細き旅立ちなり。」という言葉からも知ることができる。

鑑賞

「おくのほそ道」の旅は、「笈の小文」の旅、「更科紀行」の旅に続くものであるが、芭蕉の内面においては、「更科紀行」の旅により近いものがあると言われる。「野ざらし紀行」「笈の小文」の旅は、東海から近畿の一門の人々の間を回って連句を巻き、また、郷里上野に滞在し、時に古跡や歌枕を訪れるという旅であった。それに対して、「更科紀行」の旅は、門人・知人も余りいない山間を歩いて姨捨の月を見るという、自然と歴史への回帰の旅であった。奥羽地方への行脚を思い立ったのも、奥州の歌枕を実地踏査し、歌人や連歌師の詩魂を感得せんと志したものと見られる。

つかはと心細し」や「幻のちまた」という語句によって明らかであろう。そうした無常観は、「草の戸も」の句にも示されていて、草庵までも有為転変の相の象徴となっているのである。

「行く春や」の句は、末尾の大垣に置かれた「蛤（はまぐり）のふたみにわかれ行く秋ぞ」との照応が指摘されている。「行く春」と「行く秋」との呼応ばかりでなく、後段では舟から上がって旅へ出るのと、大垣では舟に乗って旅立つという設定も首尾照応している。それは連句において発句と挙句とが微妙に照応する点に似ていて、構成の妙をうかがわせる。「行く春」「行く秋」は晩春でも晩秋でもなく、春から夏へ、秋から冬へと移り変わっていく時の流れを如実に示す語句である。「月日は百代の過客にして、行きかふ年もまた旅人なり。」という冒頭にふさわしい季語だと言えよう。

《板書例》　旅立ち

月日＝百代の過客（永遠の旅人）
その日その日を旅としている人
例古人…西行・宗祇・杜甫
予（芭蕉）…漂泊の思い
　↓旅立ち
草の戸も住み替はる代ぞ雛の家
（三月二十七日）
・あけぼのの空朧々として
・月は有明にて
千住から出発
行く春や鳥啼き魚の目は涙

深い学びのために

学習のポイントの解答例

1 **作者は、どのような思いから旅に出ようとしているのか、考えてみよう。**

【答】 白河の関などの奥州の名所旧跡に対する関心が昂じて、特に理由もなく、何かに取りつかれたように旅に出て漂泊したいという思い。

▼ポイント▲ 「そぞろ神の…手につかず」という表現の説明を端的に行えるかどうかがこの設問の眼目である。「物につきて心を狂はせ」「招きにあひて取るもの手につかず」という表現から、あてのない旅への憧憬を読み取ることができればよかろう。また、「白河の関」「松島の月」といった奥州の歌枕に対する関心が、旅立ちへの契機となっていることも併せて指摘したい。

言葉と表現の解答例

1 **本文中から、対句表現を探してみよう。**

【答】 ①「月日は百代の過客にして」（一〇〇・2）と「行きかふ年もまた旅人なり」（一〇〇・2）。②「舟の上に生涯を浮かべ」（一〇〇・2）と「馬の口とらへて老いを迎ふる」（一〇〇・3）。③「そぞろ神の物につきて心を狂はせ」（一〇〇・6）と「道祖神の招きにあひて取るもの手につかず」（一〇〇・7）。④「股引の破れをつづり」（一〇〇・7）と「笠の緒付け替へて」（一〇〇・7）。

▼ポイント▲ それぞれの語句がどのように対応するか、注意したい。対句表現の多用によって、リズミカルな文体になっている。

2 **次の傍線部の後にはどのような表現が省略されているか、考えてみよう。**

(1) **またいつかはと心細し。（一〇一・2）**

(2) **後ろ影の見ゆるまではと（一〇一・6〜7）**

【答】 (1)（上野、谷中の桜を）見ることができるだろうか。

(2)（作者たちを）見送ろう。

▼ポイント▲ 直前までの文脈を踏まえて、省略されている表現を読み取ることができるかどうかを試している。(1)は旅立ちの時を迎えた作者の様子が描かれており、「上野、谷中の花の梢」とあることから、解答を想起したい。(2)はいよいよ出発に際して、人々が作者の進む道に「立ち並びて」いる様子が描かれ、別れを惜しんでいる様子が描かれていることを理解させたい。

言語活動の解答例

1 **「古人も多く旅に死せるあり。」（一〇〇・3～4）とあるが、作者のどのような心情が込められているか、話し合ってみよう。**

【答】（意図）「古人も…」の箇所が、作者が旅に出る大きな動機になっていることを読み取らせたい。これまでにも多くの文人達が、旅を通じて優れた作品を残してきたことに言及し、作者自身もその系譜に連なろうとする思いが込められている点を読み取りたい。

（手順）

1　作者が長い旅路の出発に際して、わざわざ「古人」の先例を取り上げる必要があるのか、そこに作者のどのような気持ちが込められているのか、生徒達に問題提起する。

2　「古人」の例とされている人々が優れた作品を残した文人達であることを、脚注を参照しながら確認する。

3　生徒達の意見をまとめる。「先人達と同様に、自分も優れた作品を残したい」という気概を読み取るような意見が出ることが想定される。それに加えて、優れた文人達の系譜に自分も連なろうとする意識を作者が持っている点にも気づかせたい。生徒達から意見が出なかった場合には、教員がその点を指摘してもよい。

4　「過去の先人達を超えるような個性的な作品を残そうとするのではなく、過去の先人に連なるということにどのような意味があるのか、考えてみよう」と再度問題提起をし、生徒達の考えをまとめる。

（ゴール）「旅に生きた昔の文学者への憧れの気持ち」や、「古人たちと同じく、旅に生き、優れた作品を残したいという心情」などが読み取れることを、話し合いの中から発見させたい。また、作者が「先人達を超える個性的な作品を残したいという意識」ではなく、「先人達の系譜に連なろうとする意識」を持っていることに着目し、生徒達が現代とは異なる価値観について考えを深める機会にしたい。

（小林　俊洋）

平泉

要旨

平泉を訪れて藤原氏三代の栄華の跡を、大門の跡や金鶏山にしのび、高館に登って、泰衡らの旧跡に往事を思い、義経主従の最期に思いをはせ、悠久な自然を前にして、人の営みのはかなさを痛感した。むなしい草むらとなるはずだった光堂が、鞘堂によって数百年の風雪に耐え、その姿を今にとどめていることに強く感動した。

構成

段落	ページ・行	段意
第一	初め～P一〇三・12〈卯の花に兼房見ゆる白毛かな　曽良〉	平泉の藤原氏三代の栄華ははかなく消え、大門の跡や金鶏山だけが残っているばかりである。高館に登って大観すると、泰衡らの旧跡が思われ、また、義経主従の最期のありさまも想像されて、自然の悠久さと人の営みのはかなさとが思い合わされ、涙を落とした。「夏草や」の句にその感慨を託したが、曽良も「卯の花に」の句に、彼の感慨を述べた。
第二	P一〇三・14〈かねて〉～終わり	以前から話に聞いていた経堂と光堂を拝観したが、鞘堂によって守られ、数百年の風雪に耐えた光堂を、今、目の当たりにできて感動し、その思いを「五月雨の」の句によって述べた。

品詞分解と現代語訳

（表示は略号で示した。略号については略号一覧参照。）

①三代（さんだい）の　栄耀（えいよう）一睡（いっすい）の　うちに　して、　大門（だいもん）の　跡（あと）
格助・体修　断・用　接助・単接　格助・体修

は　一里（いちり）こなた　に　あり。　②秀衡（ひでひら）が　跡（あと）は　田野（でんや）に
係助・区別　代　格助・場所　ラ変・終　格助・体修　係助・区別　格助・変化

なり　て、　金鶏山（きんけいざん）のみ　形（かたち）を　残す。　③まづ　高館（たかだち）に　登れ
ラ四・用　接助・単接　副助・限定　格助・対象　サ四・終　副　格助・帰着　ラ四・已

ば、　北上川（きたかみがは）南部（なんぶ）より　流るる（ながるる）大河（たいが）なり。　④衣川（ころもがは）は　和泉が城（いづみじやう）
接助・順偶　格助・起点　ラ下二・体　断・終　係助・区別

を　巡り（めぐり）て、　高館（たかだち）の　下（もと）にて　大河（たいが）に　落ち入る。
格助・経場　ラ四・用　接助・単接　格助・体修　格助・場所　格助・帰着　ラ四・終

⑤泰衡（やすひら）ら　が　旧跡（きうせき）は、　衣が関（ころもがせき）を　隔て　て　南部口（なんぶぐち）
格助・体修　係助・区別　格助・対象　タ下二・用　接助・単接

を　さし固め（かため）、　夷（えぞ）を　防ぐ（ふせぐ）と　見え（み）たり。　⑥さても　義臣（ぎしん）
格助・対象　マ下二・用　格助・対象　ガ四・終　格助・引用　ヤ下二・用　存・終　接

すぐつ　て　この　城（しろ）に　籠もり（こもり）、　功名（こうみやう）一時（いちじ）の　叢（くさむら）
ラ四・用(促音)　接助・単接　代　格助・体修　格助・場所　ラ四・用　格助・体修

と　なる。　⑦「国（くに）　破れ（やぶれ）て　山河（さんが）あり、　城（しろ）春（はる）に　して　草（くさ）
格助・変化　ラ四・終　ラ下二・用　接助・単接　ラ変・終　断・用　接助・単接

青み（あを）　たり。」　と　笠（かさ）うち敷き（しき）て、　時（とき）の　移る（うつる）まで　涙（なみだ）
マ四・用　存・終　格助・引用　カ四・用　接助・単接　格助・主格　ラ四・体　副助・範囲

を　落とし（おとし）　侍り（はべり）　ぬ。
格助・対象　サ四・用　補動・ラ変・用(丁)語り手→読み手　完・終

①藤原氏三代の輝かしい栄えも一睡の夢のようにはかなく消えて（今は廃墟になってしまった）、当時の表門の跡は一里ほど手前にある。②秀衡の（館の）跡は田や野になっていて（昔の面影はなく）、ただ金鶏山ばかりが（昔の）形を残している。③まず高館に登ってみると（眼下に北上川が見下ろされるが）、北上川は南部地方から流れてきている大河である。④衣川は和泉が城を巡って、高館の下でこの大河に流れ込んでいる。⑤泰衡らの旧跡は、衣が関を隔てて（向こうにあり）南部地方への出入り口を堅く守り、蝦夷（の侵入）を防ぐと見える。⑥それにしても（義経は）忠義の士たちをよりすぐってこの高館にたてこもり、功名（手柄を競って戦ったのだが、それ）も一時のことで（今ではその跡は茫々たる）草むらとなっている。⑦「国は乱れても山河だけは昔に変わらず残っている。都城は（荒廃しているが）春が訪れて草木だけは昔のとおり青々としていることよ。」と（杜甫の

⑧夏草や　兵どもが　夢の　跡
　間助・詠嘆　格助・体修　格助・体修

卯の花に　兼房見ゆる　白毛かな　曽良
　格助・場所　ヤ下二・体　終助・詠嘆

⑨かねて　耳驚かし　たる　二堂　開帳す。
　副　サ四・用　存・体　サ変・終

像を　残し、光堂は　三代の　棺を　納め、　三尊の　仏を　安置す。
　格助・対象　サ四・用　係助・区別　格助・体修　格助・対象　サ変・終

⑪七宝　散りうせて、　珠の　扉風の　破れ、金の　柱霜雪に　朽ちて、
　サ下二・用　接助・単接　格助・体修　格助・体修　格助・対象　サ変・終　格助・理由　タ上二・用　接助・単接

すでに　頽廃の　空虚の　叢と　なるべきを、　四面新たに　囲みて、
　副　格助・体修　格助・変化　ラ四・終　当・体　接助・逆確　形動ナリ・用　マ四・用　接助・単接

千歳の　蔓を　覆ひて　風雨を　しのぎ、しばらく　記念と　はなれり。
　格助・体修　格助・対象　ハ四・用　接助・単接　格助・対象　ガ四・用　副　格助・変化　係助・提示　ラ四・已　存・終

⑫五月雨の　降り残して　や　光堂
　格助・主格　サ四・用　接助・理由　係助・疑問

詩を思い出して共感し、）笠を敷いて（腰を下ろし）、いつまでも懐旧の涙を流したのであった。

⑧夏草や兵どもが夢の跡
　卯の花に兼房身ゆる白毛かな

⑨前々から話に聞いて（その立派さに）驚いていた（経堂・光堂の）二堂が開かれている。⑩経堂は（清衡・基衡・秀衡の）三代の将軍の像を残しており、光堂はこの三代の棺を納め、（阿弥陀・観音・勢至の）三尊の仏を安置している。⑪（かつては、柱などを華麗に飾っていた）さまざまな宝物も散りうせて、珠玉を散りばめた扉も（長い間の）風に傷んで、金箔を塗った柱も霜や雪のため朽ちて、もう少しでみな崩れ落ちて何もない草むらとなってしまうはずだったが、四方を（鞘堂を造って）新しく囲み、屋根に覆いをして風雨から守るようにして、（これで）しばらくの間は千年の昔をしのぶ記念（の建物）となって残ることになった。

⑫五月雨の降り残してや光堂

学習活動のポイント

展開

学習活動のポイント

❶ 藤原氏三代の歴史、義経との関わりについて学ぶ。知技(1)ア・(2)イ

❷「平泉」を音読をする。思判表B(1)ア

❸ 重要古語の意味・用法を確認する。知技(1)ウ・(2)ウ

→「言葉の学習」1

❹ 省略されている言葉を補いながら、段落ごとに現代語訳する。知技(1)エ 思判表B(1)ア

❺ 杜甫の漢詩「春望」の内容を理解し、そのような古典の引用が作者の心情をどう引き出しているか考える。知技(2)アエ 思判表B(1)エ

❻「夏草や」「卯の花に」の句に込められた作者の心情を理解する。思判表B(1)イ

→「学習のポイント」1

❼ 作者が見た光堂・経堂の情景についてまとめ、時間の推移とともにどのような変化がみられたか話し合う。思判表B(1)エ

❽「五月雨の」の句に表現された作者の心情を理解する。思判表B(1)イ

❶奥州藤原氏の歴史と義経との関わりについては、前の時間に課題として生徒に与えて、発表させてもよい。

【評価】言葉には、文化の継承、発展、創造を支える働きがあることを理解しているか、確認する。

・古典の世界に親しむために、作品や文章の歴史的・文化的背景などを理解しているか、確認する。

❷省略を多くすることによって、文章に緊張感を生んでいることを、実際に音読することで気づかせたい。

【評価】俳文の文体の特徴を踏まえて、内容や構成、展開などについて叙述を基に的確に捉えているか、授業中に指名して音読させることにより、確認する。

❸「が」「の」などの助詞の用法を確認させたい。

【評価】我が国の言語文化に特徴的な語句の量を増し、それらの文化的背景について理解を深め、語感を磨き語彙を豊かにしているか、ペーパーテストにより、確認する。

・古典の世界に親しむために、古典を読むために必要な文語のきまりや、古典特有の表現などについて理解しているか、ペーパーテストにより、確認する。

❹第一段落の読解は、資料の地図（P一〇二）を使いながら、平泉の歴史も解説し、作者が目にしたものに対する詠嘆の気持ちをつかませる。第二段落は、自然の力から見れば「しばらく」ではあっても、人為の力によって平泉の威光がまだ残されてい

ることへの感慨であることを理解させたい。

【評価】 文章の意味は、文脈の中で形成されることを理解しているか、ペーパーテストにより、確認する。

・省略語を補って解釈し、踏まえられている古典の意味を理解しているか、ペーパーテストにより、確認する。

❺「邯鄲の夢」の故事は辞書で生徒に調べさせる。「春望」（P一五二）の漢詩も参照する。引用された古典が意味することを押さえたら、引用文によって、作者はどのような感慨を表現しようとしたのか、生徒に問いかけたい。

【評価】 我が国の言語文化の特質や我が国の文化と外国の文化との関係について理解しているか、授業中の質問により、確認する。

・時間の経過による文字や言葉の変化について理解を深め、古典の言葉と現代の言葉とのつながりについて理解しているか、授業中の質問により、確認する。

・本文中のどのような表現に作者の気持ちが表れているかについて、作品や文章の成立した背景や他の作品などとの関係を踏まえ、内容の解釈を深めているか、教室で指摘させ、作者の旅に対する心情を五〇字程度の文章にまとめさせることにより、確認する。

❻作者の感慨を結晶化させた発句では、「夢の跡」の「夢」とは具体的に誰のどのような夢なのか、生徒にも考えさせたい。また二つの句はどのように持ち味が違うか、生徒に意見を述べさせてもおもしろい。

【評価】 季語がもたらす意味合いをつかみ、発句に込められた作者の心情について、作品や文章に表れているものの見方、感じ方、考え方を捉え、内容を解釈しているか、句の鑑賞文を一〇〇字〜二〇〇字程度の鑑賞文にまとめさせ、提出させることにより、確認する。

❼❽「曽良旅日記」から、当日は晴れていたこと、経堂は見ていないことなど、実際の旅の様子と異なっている点もあったことを紹介し、作者が事実を超えて表現しようとしたことをつかませるとよい。

❼**【評価】** 本文中のどのような表現に作者の気持ちが表れているかについて、作品や文章の成立した背景や他の作品などとの関係を踏まえ、内容の解釈を深めているか、教室で指摘させ、段落ごとの作者の思いを五〇字程度の文章にまとめさせることにより、確認する。

❽**【評価】** 季語がもたらす意味合いをつかみ、発句に込められた作者の心情について、作品や文章に表れているものの見方、感じ方、考え方を捉え、内容を解釈しているか、句の鑑賞文を一〇〇字〜二〇〇字程度の鑑賞文にまとめさせ、提出させることにより、確認する。

まとめと発展

学習活動のポイント

❶「夏草や」「卯の花に」の句を詠む際に想起された歴史上の出来事について、それぞれ調べさせる。主態
→「言語活動」1

❶資料集や図書館などを利用して、平泉の歴史的背景や義経との関わりを押さえて、作者が抱いた、時の流れと人の営みに対する詠嘆の気持ちをつかみ、芭蕉が句に込めた思いについて解釈させる。

【評価】進んで人生と旅についての作者の考えを理解し、俳諧の修辞や古典を踏まえた表現など、作者の工夫を読み味い、学習課題に沿って、「夏草や」「卯の花に」の句を詠む際に想起された歴史上の出来事について調べようとしているか、分析する。

指導上の注意点と発問例

●一〇三ページ

問　**「栄耀一睡のうちにして」（2行目）と「功名一時の叢となる。」（7行目）の表現に共通している点は何か。**

答　人生の栄華のはかなさ、むなしさを表している点。「一睡のうち」は中国の故事、盧生の「邯鄲の夢」から出た言葉で、「一炊」が正しいが、中世以降しばしば混同して用いられた。唐の盧生が趙の都の邯鄲で道士から枕を借りて寝たところ、立身出世して富貴の身となり、栄華を極めた夢を見たが、夢が覚めてみると、初め炊きかけてあった黄粱が、まだ十分に煮えていなかったほど短い時間のことであったという話による。人生の栄華のはかなさを例えた「黄粱一炊の夢」を踏まえた表現。「功名一時の叢となる」は、「功名手柄を争ったが、その功名も一時的なはかないもので、その当時の功名の場は、今は叢と化している」の意。

問　**「一睡」は、中国の故事を踏まえるなら、本来どのような漢字を当てるべきか。**

補答　一炊

「一睡」が本来「一炊」ということ、「一炊」が中国の故事より出ていることを理解させる。さらに「一炊」が取り入れられて、

語句の研究

●一〇三ページ

1平泉　岩手県の南部、西磐井郡内の地。北上川が貫流する。奥州藤原氏の拠点として栄えた。

2三代の栄耀　藤原清衡・基衡・秀衡三代の栄華。清衡は陸奥守経清の子で、陸奥押領使となり、嘉保元（一〇九四）年平泉に館を構え、京の文化を移植し、さらに長治二（一一〇五）年に中尊寺を創建した。以後、平泉はその子基衡（陸奥押領使、保元二〔一一五七〕年没）、秀衡（鎮守府将軍、文治三〔一一八七〕年没）までの三代の間、奥羽の政治・文化の中心をなした。文治五（一一八九）年に泰衡（秀衡の子）が源頼朝に滅ぼされた。

2一睡のうちにして　「一睡」は一眠りのあいだ。ごく短い時間。謡曲『邯鄲』で知られる中国故事の「邯鄲の夢」では、粟飯が炊き上がるわずかな時間に青年盧生が一眠りし、夢のなかで栄耀栄華をきわめるが、目覚めて夢であったことを知る。この故事から、栄華のはかなさをたとえて「一炊の夢」という。「一睡」は誤用だが、近世にはしばしばこのように表記された。

2大門の跡　「大門」は「（城や寺などの）表門、総門」。ここでは藤原氏三代の政庁のあった平泉館の大門の跡を指している。ただし芭蕉が見た大門の跡が何かは不明であり毛越寺の南大門跡とする説などがある。

2一里こなたにあり　平泉館とその大門との間が一里もあったことを表現したもので、その広大なさまに対して感嘆している。

2秀衡が跡　泰衡の居館であった伽羅御所の跡をさす。

3金鶏山　秀衡が居館の西に富士山に似せて築いた山で、山頂に黄金の鶏を埋めて、平泉を鎮護させたという。

3高館　源義経の居館があった所。中尊寺の南東八〇〇メートル余、平泉町平泉字柳御所にある小山の頂上に天和三（一六八三）年造営と伝えられる義経堂がある。

3南部　盛岡（現在の岩手県盛岡市付近）を中心とする南部地方。平泉の北方にあたる。江戸時代には盛岡藩（南部藩、藩主は南部氏）の領地。

4衣川　北上川の支流。中尊寺の裏、高館の北で北上川と合流する。歌枕。「袂より落つる涙はみちのくの衣川とぞいふべかりける」（「拾遺和歌集」恋二・よみ人知らず）、

謡曲「邯鄲」が作られ流布すると、我が国にこの故事を踏まえた表現や小説が出現する。（例）恋川春町「金々先生栄花夢」、芥川龍之介「黄粱夢」など。

問 **「高館に登れば、北上川南部より流るる大河なり。」（3行目）の部分には、どのような語句が省略されているか。**

答 「高館に登れば、北上川」見ゆ。この川は「南部より流るる大河なり。」の傍点で示したような語句が省略されている。

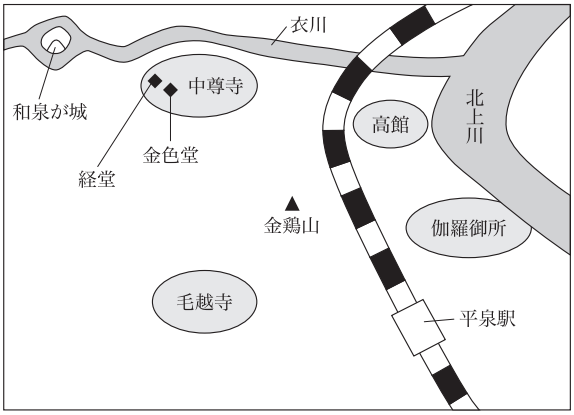
補 本来なら、二つに分けて表現するところを、芭蕉独特の圧縮した表現を用いている。最小限の言葉で表現する俳諧のあり方に通じる文章と言える。ねじれ文で、現在では悪文となるが、芭蕉をはじめ、西鶴などにもこのような文章が見られる。

問 **「さても」（6行目）以前と、それ以後「落とし侍りぬ」（10行目）までとでは、文章の内容や調子にどのような違いがあるか。**

答 第一段は平泉一帯の地を概観した様子を、簡潔で力強い文体で述べている。第二段は、平泉を見て得た感慨、つまり、自然の悠久さと人の営みのはかなさとを思う気持ちを、詠嘆的な調子で表現している。

補 転換の呼吸のすばらしさを味わわせたい。

問 **「草青みたり」（9行目）は、脚注に示した杜甫の詩句の、どこを踏まえた表現か。**



「涙をば衣川にぞながしつるふるきみやこをおもひ出でつつ」（「西行法師家集」）。

4 和泉が城　秀衡の三男、和泉三郎忠衡の居館で、中尊寺の北西一キロほどの所にあった。忠衡は、父秀衡の遺命に従い義経を守ったが、兄泰衡らに攻められて自害した。

4 泰衡らが旧跡　「泰衡」は秀衡の次男。源頼朝の命で義経主従を滅したが、後、頼朝に討たれた。泰衡の館の跡は、平泉館の南にあって、ここの文の内容とそぐわない。「秀衡が跡」「和泉が城」を含めた、藤原氏全体の居城の跡を、「泰衡らが旧跡」と大まかに言ったものと考えられる。

5 衣が関　高館の西方の古関と、中尊寺の北方二里の所の新関と二つあるが、「曽良旅日記」の名勝備忘録には「衣関、高館ノ後、切通シノヤウナル有リ。是也。南部海道也。ソバノ小キ土橋ヲ桜川ト云。」とあるので、ここは古関を指すと考えられる。

5 南部口　平泉から南部地方へ通ずる出入口。

7 義臣　正義・忠義の臣。義経の家臣に限らないという説もあるが、曽良の句に「兼房」とあることなどから、ここは義経の家臣のこと。高館最後の日、弁慶・鈴木兄弟・伊勢三郎など選り抜きの十余騎が一戦を試み、華々しく散ったと「義経記」巻八「衣川合戦の事」の中に見える。

8 国破れて……　杜甫「春望」の「国破レテ山河在リ、城春ニシテ草木深シ」による。「城」の読み方には「じょう」と「しろ」の二説がある。「草青みたり」については古文の窓6「写本の本文―「青々たり」と「草青みたり」」の解説参照。

問　**杜甫の詩句の「草木深し」の一部を変えて、「草青みたり。」（9行目）として引用したのは、どのような効果があるか。**

答　引用文がそのまま地の文に流れ込む形となったため、読者は杜甫の詩の感慨から、芭蕉の感慨へとスムーズに移行することができ、作者の印象的実感を深く味わうことができるという効果を上げている。また、「青みたり」とすることで色彩が印象的になり、次の「夏草や」の句のイメージにつながっていく効果もある。

補　芭蕉が訪れたのは五月の夏。この季節の実感を入れ込んだのである。杜甫の詩をよく理解した上でなければ、このように一部を改変して自己の文章に組み入れることは難しいことに注意したい。

問　**「夏草や」（11行目）の句について、**
[中](1)**芭蕉は、今、どのような情景を見てこの句を詠んでいるのか。**
[中](2)**その場所では、かつてどのような光景が繰り広げられていたのか。**
[易](3)**「兵ども」とは、具体的にはどのような人たちか。**
[易](4)**「兵どもが夢」とは何を求める夢か、本文中の二字の熟語を二つあげよ。**

答　(1)夏草が一面に生い茂っている情景。(2)義経一党や藤原氏の一族が功名を夢見、栄華にふける光景。(3)義経主従や奥州藤原氏一族　(4)栄耀・功名

問　**「夏草や」（11行目）の句についてまとめた次の空欄を後掲の語句で補え。**

夏　草―［①］―悠　久―［②］
　⇔　　⇔　　⇔
兵ども―［③］―［④］―戦　争
　⇔　　⇔　　⇔
夢の跡―功　名―はかなさ―［むなしさ］

〔三代　感動　無常　自然　人間　平和　旧跡〕

答　①自然　②平和　③人間　④無常

問　**「卯の花に」（12行目）の句について、**
[易](1)**季語と季節を示せ。**
[中](2)**曽良は今、どのような情景を見てこの句を詠んでいるのか、色彩的な面も含めて説明せよ。**
[難](3)**その情景から、曽良はどのような光景を連想しているのか。**
[難](4)**「夏草や」（11行目）の句との共通点を、簡潔に答えよ。**

答　(1)季語＝卯の花　季節＝夏　(2)白い卯の花が一面に咲き乱れている情景。(3)義経の家来兼房が、白髪を振り乱して奮戦している光景。(4)眼前の自然の情景から一転、歴史に思いをはせている点。

問　**「かねて耳驚かしたる」（14行目）に込められた思いをはせている点。**

---

9 城春にして草青みたり　「して」は、逆接とした「国破れて」の「て」と対応しているとして、ここでは、順接（単純接続）の接続助詞とした。

10 涙を落とし侍りぬ　「侍り」文調を重々しくするための雅語的表現として用いているという説もあるが、ここでは、普通の丁寧語の補助動詞とする説に従った。

11 夏草や兵どもが夢の跡　季語は「夏草」で季節は夏。切れ字は「や」。句意は、「今となってはこの辺りは夏草が一面に生い茂っているだけだが、ここは昔、義経一党や藤原氏の一族が功名を夢み栄華にふけった跡である、だがそれも一場の夢と過ぎ去り、今は夏草だけが無心に茂っているばかりである」。平泉に至った芭蕉の心持ちは、この句に集約されていると言っていい。この句は、直接には「さても義臣すぐつて」以下の前文を受けている。しかし、旧跡に立って、眼前にある茫々たる夏草の茂りを見るにつけて、人生の無常を感じ、自然の悠久さにそれを対比させて感じ入っているのである。地の文と、句中の語との関連は、「栄耀一睡のうち」「功名一時」は「夢の跡」と、「田野」「叢」「草青みたり」は

れた、芭蕉の気持ちはどのようなものか。

答 中尊寺については、事前に調べてもいただろうし、また、それを拝観することの期待も大きかったであろう。その期待と、目の当たりにそれを見ることができる喜びの気持ちとが感じられる表現である。

補 白河の関・松島を訪れることを目的としていた芭蕉は、義経ゆかりの地であり、高い文化を誇った平泉も、その目的地の一つとして考えていたに違いない。

問 **「二堂」（14行目）とは、何と何か。**

答 経堂と光堂

●一〇四ページ

問 **「千歳の記念」（5行目）となる対象は、自然物・人工物のどちらか。**

答 人工物

問 **「しばらく」と「千歳」とはどう考えれば矛盾しないか、説明せよ。**

答 人の営みは自然の悠久に対してははかないものであり、その意味では、長い年月と捉えがちな「千歳」も「しばらく」という形容がふさわしい。

問 ◉**「しばらく」（5行目）と言ったのは、なぜか。**

答 無常の世の中では、絶対的に永遠なるものはない、特に自然の悠久に対しては、人の営みははかないものであるという考えが芭

「夏草」と、「秀衡」「泰衡」「義臣」は「兵ども」とそれぞれ対応すると考えられよう。地の文に示された感慨を巧みに句に盛り込み、地の文と句とが渾然一体となって、深い感動を盛り上げている、俳文独特の表現技巧を味わわせたい。

12 卯の花に兼房見ゆる白毛かな　季語は「卯の花」で季節は夏。切れ字は「かな」。「折から一面に咲き乱れている白い卯の花を眺めていると、その昔白髪を振り乱し奮戦して義経のために一命を落とした忠臣兼房の姿が浮かんできて、しみじみと昔のことがしのばれるよ」の意。「兼房」は、十郎権頭兼房。義経の北の方に仕え、共に奥州に下った。義経らの自害を見届けた後、敵の大将を道連れに壮絶な最期を遂げた。「義経記」巻七「判官北国落ちの事」には兼房のことを、「白髪まじりのもとどり引き乱し」と表現してある。

13 曽良　本名、河合惣五郎。芭蕉の信頼厚く、「鹿島紀行」の旅にも同行している。この旅では、「曽良旅日記」を記している。

14 二堂開帳す　「二堂」は経堂と光堂。「開帳」は、厨子の扉を開いて、その中に安置した仏像を一般大衆に拝ませること。「曽良旅日記」に「経堂ハ別当留主ニテ不開」とあり、経堂の開帳はなかったが、光堂については「別当案内」とある。

14 経堂　経文を納めておく堂。天仁元（一一〇八）年清衡が発願し十数年かけて完成させた。二階建てであったが建武四（一三三七）年上層焼失のため、後に修理した。「紺紙金泥一切経」などを納めてあり、現在は「経蔵」と呼ばれている。

●一〇四ページ

1 三将の像　「三将」は藤原清衡・基衡・秀衡のこと。経堂には本尊の文殊菩薩、脇士の優闐大王・善財童子が安置されていた。清衡・基衡・秀衡の像があったかどうかは不明。「曽良旅日記」によれば実際には経堂は開帳されず、芭蕉は経堂の中を見ていないと考えられる。

1 光堂　阿弥陀堂のことで、内外の壁に黒漆を塗り金箔を押し、柱や梁に螺鈿をちりばめるなどしているところから「金色堂、光堂」などと俗称されている。阿弥陀如来を本尊とするお堂で、現世で極楽浄土を具現するために荘厳華麗を極めた建築にした。

1 三代の棺　清衡・基衡・秀衡三代の遺骸を納めた棺。遺骸はミイラとなり残っている。

蕉の心の根底にあって、「千歳」（実際の千年ではなく長い年月の意）をも「しばらく」と言ったのである。

補 第一段落の城・館が全て失われて、叢になっていることを念頭に置いて、「しばらく」と表現したのである。

問 **「五月雨の」（6行目）の句について、**
(1)季語と季節を示せ。
(2)「降り残し」とは句中ではどういう意味か。
(3)句中で①自然、②人工物を示すものは、それぞれ何か。
(4)この句における「五月雨」の説明として、適切なものを次の中から選べ。
(ア)今降っている五月雨。
(イ)今降りやんだばかりの五月雨。
(ウ)今年降る五月雨。
(エ)毎年降る五月雨。

答 (1)季語＝五月雨　季節＝夏　(2)「語句の研究」参照。(3)①五月雨　②光堂　(4)(エ)

補 「語句の研究」参照。

2三尊の仏　本尊は阿弥陀如来、脇士が観世音菩薩・勢至菩薩。

2七宝　仏教における七つの宝物。経典によってその内容は異なる。

4四面新たに囲みて　光堂を覆う鞘堂は、正応元（一二八八）年、鎌倉七代将軍惟康親王が平貞時・宣時に命じて造らせたものなので、「新たに」とするのはおかしく、寛永年間（一六二四～一六四四）の後水尾院の勅命による修復のことを指すかとする説もあるが、「囲みて」を考えれば、鞘堂ができたときとするべきである。なお現在は、昭和四十三（一九六八）年の金色堂復原修理に合わせて、新たな鞘堂が作られたため、旧鞘堂は経蔵の隣に移され保存されている。

5千歳の記念　城も館も失われて叢となっている。にもかかわらず、同時期に建立された経堂・光堂は、滅びずに立派に残されている。本来廃れて叢となるべきところを覆いをして人為的に保存しているのである。芭蕉は「三将の像を残し」「三代の棺を納め」「三尊の仏を安置す」という人間の営みと、「風に破れ」「霜雪に朽ちて」という自然の浸食との対立を描きつつ、その奥に潜む自然と人為との対立・相克の相を見据えている。そして、風雪をしのいで残る眼前の光堂に対して、時の流れに耐えてきた人の営みへの感動を覚え、その恩恵に浴して「千歳の記念」の拝観ができることを素直に喜んでいる。その気持ちが「五月雨の…」という絶唱に結実したのである。

6五月雨の降り残してや光堂　季語は「五月雨」で季節は夏。切れ字は「や」。「激しい五月雨が毎年降るのでは、長い年月には何もかも朽ちてしまうだろう。ところが今日光堂に来てみると、千年も前の建物が、昔の豪華さをとどめて残っている。これはさすがに五月雨も、この光堂にだけは遠慮して降らなかったのであろうか」の意。「降り」には「古り」を掛け、「光堂」には「光り輝く」意を寓していると考えられる。なお、ここでの「や」は疑問の意を表すが詠嘆の意も込められている。この句については、「現在五月雨が降っているが、光堂の所だけは降り残している感じで、明るく輝いている」という実感の句とする見方もあるが、曽良本「おくのほそ道」に、この句が「五月雨や年々降りて五百たび」とあることや、「曽良旅日記」によれば、当日は晴れていたことなどから「降り残して」を空間的な意味にとらず、時間的な意味にとるのが現在では普通である。

鑑賞

「おくのほそ道」の旅は、一面では義経伝説への旅でもある。奥州は義経伝説の宝庫で、柳田國男の研究によって、「義経記」が東北地方根生いの文学であって、東北地方の人々にとって、義経と彼に従って奮戦した勇士たちの物語は、家の祖先の英雄譚として語り継がれた様子が明らかにされている（「東北文学の研究」など）。こうした義経伝説は、「平家物語」「義経記」やそれを素材とした謡曲・浄瑠璃・幸若舞曲などによって、中世・近世を通して国民文学と言うべき位置を占めていた。芭蕉は、白河の関を越えてから佐藤庄司の旧跡を訪ね、和泉三郎寄進の塩竈社頭の宝灯を見、塩竈ではさらに奥浄瑠璃を聞くなど、各地に義経主従の歴史の跡を訪問した。そうした中で培われてきた「判官びいき」の心情が、ここ平泉で一挙に噴き出し、感動の頂点に立ったのである。

「おくのほそ道」の旅程は、江戸を起点に太平洋側を北上、平泉を北端として日本海側に抜けて南下というコースで、いわば平泉は地理的にも頂点に位置する。また、景観の妙を詠嘆する松島・象潟に挟まれてもいて、重要な位置を占めることは間違いない。

本段では歴史と美術を通して、人間のはかなさを詠嘆的に述べている。旅立ちで流された離別の涙が、世の無常を観じて、高館の土の上に流されたのである。多情多感な詩人としての芭蕉の真髄が発揮されていると言えよう。第一段は、高館に立って眺めた藤原氏の遺跡平泉と、義経主従の最期の往時をしのび、その感慨を、簡潔な表現の中に極めて印象深く述べている。まず「三代の栄耀一睡のうちにして」と人間のもろさ、はかなさを端的に記し、次いで「金鶏山のみ形を残す」「国破れて山河あり」と自然の悠久さを実感を込めて詠嘆的に述べ、その感慨を集約する形で「夏草や」の句に続けている。この句は、歌枕を離れて、歴史と現実とを巧みに詠み込み、しかもそこに自己の心情をも織り込んでいる点で画期的な句であった。第二段においてもやはり、歴史と自然とを対比して把握しているが、光堂が五百年来の風雪に耐えて昔の姿をとどめていることに深く感動し、その結晶が「五月雨の」の句となったのである。理屈っぽく観念的な句とも評されるが、「三代の栄耀」も夢と消えて、「兵どもが夢の跡」となった遺跡に残る光堂に対する感動を見事に詠んでいると言ってよかろう。

《板書例》歴史的事項との関連

藤原氏三代の栄華
↓一睡の夢のように消える

①秀衡の館の跡
・田野になりて、金鶏山のみ形を残す。
↓昔の様子は見られない

②泰衡の館の跡
・功名一時の叢となる。
↓昔の功名の跡はなく、今では草むらになっている。
国破れて山河あり
城春にして草青みたり（杜甫）
夏草や兵どもが夢の跡

③二堂（経堂・光堂）
・七宝散りうせて～
↓昔をしのぶ記念
五月雨の降り残してや光堂

深い学びのために

学習のポイントの解答例

1　**「夏草や」「五月雨の」の句には、それぞれ作者のどのような心情が込められているか、考えてみよう。**

【答】「夏草や」の句には、奥州藤原氏の栄華や義経主従の勇壮で悲劇的な最期も、時の経過と共にはかなく忘れ去られることを痛感した作者の心情が込められている。

「五月雨の」の句には、逆に、長い時間的経過の中でも光堂がはるか昔の姿をとどめていることに深く感動した作者の心情が込められている。

▼ポイント▲　「夏草や」の句からは、「功名一時の叢となる」の一文や、杜甫の「春望」にみられる「城春にして草青みたり」の一節が想起される点など、表現上の類似点から、さまざまな作品との密接な関連性がうかがえることにも着目したい。

言葉と表現の解答例

1　**次の傍線部の助詞の用法を、確認してみよう。**

(2)　(1)　**夏草や兵どもが夢の跡（一〇三・11）**

(2)　**すでに頽廃空虚の叢となるべきを（一〇四・3）**

(3)　**五月雨の降り残してや光堂（一〇四・6）**

【答】(1)(2)　格助詞（連体修飾格）　(3)　格助詞（主格）

▼ポイント▲　「が」は現代語のような主格を表す用法よりも、「…の」と訳し、体言の修飾を表すことが多い。「の」については、他にも同格（「…で」）や比況（「…のように」）などの用法もあるので、文脈に応じて適切な解釈を施せるように注意したい。

言語活動の解答例

1　**「夏草や」「卯の花に」の句を詠む際に想起された歴史上の出来事について、それぞれ調べてみよう。**

【答】（意図）「夏草や」「卯の花に」「五月雨の」はそれぞれ歴史的事実を背景に詠まれた句であることを、関連する史実を調べて気づかせる。

（手順）

1　教科書の脚注や資料集、図書室の資料、インターネットなどを活用して、源義経とその主従が奥州へ落ちていった理由、奥州藤原氏の歴史などを調べる。

2　調べたことを整理し、芭蕉がそれぞれの句を詠んだ場所でどのような出来事が起こったかを確かめる。地図に書き入れるなどしてもよい。

3　それぞれの発句を読み返してみて、どのように印象が変わっ

たか、考えさせる。鑑賞文を書かせてもよい。

（ゴール）発句が詠まれた歴史的背景を知ることで、発句への理解、鑑賞を深めさせたい。特に、歴史的背景を知ることで、それまで何の変哲もなかった風景の見え方が変わり、作品についても新しい解釈が生まれる可能性を生徒達に実感してもらいたい。

（小林　俊洋）

古文の窓❻　写本の本文―「青々たり」と「草青みたり」

教材のねらい

版本と写本の違いを知り、写本では本文が変化することについて、具体例に即して理解を深める。

「青々たり」と「草青みたり」は、漢語と和語という違いがある。どちらの表現がよいと思うか、生徒自身に考えさせたい。

解説

写本とは、書き写された本のことである。これに対して、印刷された本のことを版本という。

江戸時代には、印刷技術が民間に普及し、多くの本が出版されるようになった。同じ版を使って印刷された本は、当然ながら同じ本文を持っている。

一方、江戸時代には写本も多く流通していた。写本は書き写される過程で本文が変化することも多い。書写の過程で、もとの写本の本文にあった誤字や脱字が訂正されることもあり得る。あるいは逆に、もとの本文を写し間違えることもあり得る。

『おくのほそ道』は、元禄七年に芭蕉が死去した後、元禄十五年に京都の版元井筒屋庄兵衛から出版された。この版本のもとになった本（底本）は、西村本と呼ばれる写本である。この西村本のほかにも、『おくのほそ道』には中尾本・曽良本・柿衞本とよばれる写本がある。

これらの写本について、『おくのほそ道大全』（笠間書院、二〇〇九年）を参考にしてまとめると、次の通りである。

○中尾本…芭蕉自筆の草稿本とされる。書込み・貼紙訂正がある。中尾松泉堂所蔵。

○曽良本…中尾本を書写したとされる。本文には補訂が施されている。天理図書館所蔵。

○西村本…素龍が清書した本。補訂後の曽良本を清書したと考えられる。ただし曽良本と西村本の間には異同がある。西村家所蔵。

○柿衞本…素龍が書写した本。西村本との間には異同がある。柿衞文庫所蔵。

この教材では、中尾本と曽良本の顕著な違いが見られる箇所として、「平泉」の「城春にして…」の箇所を紹介している。ちなみに、教科書の「平泉」の本文が依拠している日本古典文学大系の本文は、西村本を底本としている。

この三つの写本の当該箇所を、あらためて併記してみよう。

○中尾本「城春にして青々たり」

○曽良本「城春にして青みたり」。ただし「青」の上に「草」を補う。

○西村本「城春にして草青みたり」

教材の図版を参照してほしい。「中尾本」の図版の二行目に「青々たり」という表記がみえる。「曽良本」は図版の二行目に「青みたり」とあり、「青」の上に朱筆で「草」と書かれている。西村本の本文は、このように補訂された後の曽良本の本文を写し

ていると考えられる。

「城春にして…」という表現は、一〇三頁の脚注12にある通り、杜甫「春望」にある「城春ニシテ草木深シ」をふまえたものである。「青々たり」「草青みたり」は、この「草木深シ」を言い換えた表現である。

中尾本は芭蕉自筆本とされる。西村本は芭蕉が携行した本である。表現の改変を推敲の軌跡ととらえれば、芭蕉は当初「青々たり」という表現がよいと考えていたが、最終的にはこれを「草青みたり」にあらためた、と考えることもできる。しかし、この改変については諸説があり、芭蕉はもともと「青みたり」とするつもりであったとする説もある。

ところで「青々たり」と「草青みたり」は何がどう異なるのであろうか。「青々たり」は、あおあおとしている様子を言う。文脈に即して言えば、春になって草があおあおとしている、ということである。「草青みたり」の「青む」も、草などがあおく茂る意である。

要するにどちらの表現であっても、春になって草があおあおと茂っている様子を表していることに変わりはない。二つの表現の違いは、その情景を漢語の「青々」と和語の「青む」のどちらで表すか、という点にある。

漢詩の一節を言い換えるにあたって、漢語を選ぶか、和語を選ぶか。自分ならば「青々たり」と「草青みたり」のどちらを選ぶか。生徒自身に考えさせたい。

参考

中尾本・曽良本・西村本・柿衞本の説明は、楠本六男・深沢眞二編『おくのほそ道大全』（笠間書院、二〇〇九年）所収の藤原マリ子編「『おくのほそ道』諸本対照表―より深く読むために」の「凡例」を参考にした。

「青々たり」「草青みたり」の改変の事情に関する諸説は、同『おくのほそ道大全』の「各章段を読み込むためのガイド」の「三六、高舘覧古」に詳しい。

江戸時代における写本と版本の関係については、塩村耕「近世における写本と版本の関係は」（松田浩・上原作和・佐谷眞木人・佐伯孝弘編『古典文学の常識を疑う』勉誠出版、二〇一七年）が参考になる。

（佐藤　至子）

種の浜

要旨

ますほの小貝を拾うために種の浜に舟で向かった。たどり着いた浜には、粗末な漁師の小家と法花寺があった。そこで茶や酒を飲みながら過ごす夕暮れの寂しさに大いに感動して、二首の句を詠んだ。そしてその日のあらましは等栽に書かせて寺に残す。

構成

段落	ページ・行	段意
第一	初め～P一〇六・4（吹き着きぬ。）	ますほの小貝を拾うために、種の浜に舟を走らせた。天屋なにがしという者は食事や酒を用意させ、従者を多く舟に乗せて向かう。追い風を受けて、すぐに到着した。
第二	P一〇六・5（浜は僅かなる）～P一〇六・8（萩の塵）	浜には粗末な漁師の小家とわびしい法花寺があった。そこで茶や酒を飲みながら迎えた夕暮れの寂しさは非常に感動的であった。そこで二首の句を詠んだ。
第三	P一〇六・9（その日のあらまし、）～終わり	その日のあらましは等栽に書かせて寺に残す。

品詞分解と現代語訳

（表示は略号で示した。略号については略号一覧参照。）

①十六日、空 霽れ たれ ば、 ますほ の 小貝 拾は ん と、
（じふろくにち／そら／は／ラ下二・用／完・已／接助・順理／格助・体修／こがひ／ひろ／八四・未／意・終／格助・引用）

種の浜 に 舟 を 走す。 ②海上 七里 あり。 ③天屋なにがし と いふ 者、 破籠・小竹筒 など 細やかに したため させ、 僕 あまた 舟 に 取り乗せ て、 追ひ風 ときの 間に 吹き着き ぬ。
（いろ／はま／格助・帰着／ふね／格助・対象／サ下二・終／かいじやう／しちり／ラ変・終／てんや／格助・引用／しもべ／使・用／格助・時／格助・引用／ものわりご／ささえ／副助・例示／こまか／形動ナリ・用／マ下二・未／使・用／おかぜ／格助・体修／ま／格助・体修／ふき／カ四・用／つき／完・終）

④浜 は 僅かなる 海人 の 小家 にて、 侘しき 法花寺 あり。
（はま／係助・提示／わづか／形動ナリ・体／あま／格助・体修／こいへ／格助・状態／わび／形シク・体／ほつけでら／ラ変・終）

⑤ここ に 茶 を 飲み、 酒 を 温め て、 夕暮れ の 寂しさ、 感に 堪へ たり。
（代／格助・場所／ちや／格助・対象／マ四・用／さけ／格助・対象／あたたむ／マ下二・用／接助・単接／ゆふぐれ／格助・体修／さびし／格助・対象／かん／八下二・用／た／完・終）

⑥寂しさ や 須磨 に かち たる 浜 の 秋 の 塵
（さびし／間助・詠嘆／すま／格助・対象／タ四・用／完・体／格助・体修／あき／格助・体修／ちり）

⑦波 の 間 や 小貝 に まじる 萩 の 塵
（なみ／格助・体修／ま／間助・詠嘆／こがひ／格助・対象／ラ四・体／はぎ／格助・体修／ちり）

⑧その 日 の あらまし、 等栽 に 筆 を 取ら せ
（代／格助・体修／ひ／格助・体修／とうさい／格助・対象／ふで／格助・対象／と／ラ四・未／使・用）

①（八月）十六日、空が晴れたので、ますほの小貝を拾おうと、種の浜に舟を走らせる。②海上（の距離）は七里である。③天屋なにがしという者が、割籠（に入れた弁当）と小竹筒（に入れた酒）などをこまごまと用意させ、従者を大勢、舟に乗せて、追い風を受けて、ほんのわずかな時間で（浜に）吹き寄せられて着いた。

④浜には粗末な漁師の小さな家があり、わびしい法華宗の寺（本隆寺）がある。⑤ここで茶を飲み、酒を温めて（飲み）、（時間を過ごして迎えた）夕暮れの寂しさは、非常に感動的であった。

⑥寂しいことだ、（『源氏物語』に書かれている）須磨（の秋）にまさる（この）浜の秋は。

⑦（色の浜に寄せる）波の間に、小さな貝にまじって、萩の花の塵（散った花びら）がある。

⑧その日の（行楽の）あらましを、等栽に書かせて、寺（本隆寺）に残す。

て　接助・単接
寺（てら）に　格助・場所
残（のこ）す。　サ四・終

学習活動のポイント

■ 導入

学習活動のポイント

❶ 西行や「山家集」と芭蕉との関係、「源氏物語」の概要について学ぶ。知技(1)ア

❶詩歌編の西行の歌（二六四ページ）なども参考にしながら、芭蕉の発句や紀行文に西行の「山家集」からの影響があることをつかませたい。「源氏物語」については、「種の浜」の文中に須磨巻の一節が踏まえられていることが押さえられればよい。

【評価】 言葉には、文化の継承、発展、創造を支える働きがあることを理解しているか、確認する。

■ 展開

学習活動のポイント

❶「種の浜」を音読する。思判表B(1)ア

❷ 作者が種の浜に行った目的について読み取らせる。知技(1)エ 思判表B(1)エ

❸「寂しさや」の句に込められた作者の心情を理解する。思判表B(1)イ →**「学習のポイント」1**

❹「波の間や」の句に込められた表現の工夫、効果について話し合う。知技(1)ウ・(2)ウエ →**「言葉と表現」1**

❶情景を味わいながら音読させる。

【評価】 俳文の文体の特徴を踏まえて、内容や構成、展開などについて叙述を基に的確に捉えているか、授業中に指名して音読させることにより、確認する。

❷本文中から該当箇所を指摘させる。「ますほの小貝を拾はんと」（一〇六・2）と冒頭に示されているので該当箇所はすぐに見つけられるだろう。導入の西行「山家集」との関連をふまえて、「ますほの小貝を拾」うことが作者にとってどのような意味を持つのかを理解させたい。

【評価】 文章の意味は、文脈の中で形成されることを理解しているか、ペーパーテストにより、確認する。

・本文中のどのような表現に作者の気持ちが表れているかについて、作品や文章の成立した背景や他の作品などとの関係を踏まえ、内容の解釈を深めているか、教室で指摘させ、段落ごとの作者の思いを五〇字程度の文章にまとめさせることにより、確認する。

❸教科書の脚注に示した西行の和歌や「源氏物語」の引用部分を参考に、句が詠まれた背景にある文学作品について理解させる。

【評価】季語がもたらす意味合いをつかみ、発句に込められた作者の心情について、作品や文章に表れているものの見方、感じ方、考え方を捉え、内容を解釈しているか、句の鑑賞文を一〇〇字〜二〇〇字程度の鑑賞文にまとめさせ、提出させることにより、確認する。

❹句に表れる色彩感覚や情景について想像させ、解釈を深める。

【評価】我が国の言語文化に特徴的な語句の量を増し、それらの文化的背景について理解を深め、語感を磨き語彙を豊かにしているか、ペーパーテストにより、確認する。

・古典の世界に親しむために、古典を読むために必要な文語のきまりや、古典特有の表現などについて理解しているか、ペーパーテストにより、確認する。

・時間の経過による文字や言葉の変化について理解を深め、古典の言葉と現代の言葉とのつながりについて理解しているか、授業中の質問により、確認する。

■ まとめと発展

学習活動のポイント

❶作者が「ますほの小貝」を拾おうとした理由について話し合わせる。主態　→「言語活動」1

❶作者にとって「ますほの小貝」を拾うことがどのような意味を持つのかを話し合わせることで、作者の「おくのほそ道」の旅の目的について理解を深める。

【評価】進んで人生と旅についての作者の考えを理解し、俳諧の修辞や古典を踏まえた表現など、作者の工夫を読み味わい、学習課題に沿って、作者が「ますほの小貝」を拾おうとした理由について話し合おうとしているか、分析する。

指導上の注意点と発問例

● 一〇六ページ

問 **「追ひ風ときの間に吹き着きぬ。」（4行目）とは、どのような状況か。**

答 芭蕉たちの乗った船が追い風を受けて、短時間で浜に着いた。

問 **「僅かなる海人の小家」（5行目）とはどのようなものか。**

答 漁師の住む粗末な小さい家。

問 **「夕暮の寂しさ、感に堪えたり。」（6行目）とあるが、その情景が具体的に述べられている箇所を抜き出せ。**

答 「浜は僅かなる海人の小家にて、侘しき法花寺あり。」（5行目）。

問 **「感に堪えたり。」（6行目）とは、どのような意味か。**

答 非常に感動すること。

問 **「寂しさや」（7行目）と「波の間や」（8行目）のそれぞれの句の季語と季節を答えよ。**

答 寂しさや…季語＝秋　季節＝秋
波の間や…季語＝萩　季節＝秋

補 「語句の研究」参照。

問 **「波の間や」（8行目）の句の「萩の塵」とは、何か。**

答 萩の花

語句の研究

● 一〇六ページ

2十六日　旧暦の八月十六日。季節は秋である。

2ますほの小貝　「ますほ」は「ますお」と発音。西行の和歌に「汐染むるますほの小貝拾ふとて色の浜とはいふにやあるらむ」とある（『山家集』）。芭蕉がますほの小貝を拾おうと種の浜を訪れたのは、この和歌が念頭にあったからであろう。

2種の浜　現在の福井県敦賀市色浜。敦賀半島の北東部にあり、敦賀湾に面した浜。「色浜」「種浜」の二つの表記があるが、現代の辞書等では「色浜」で立項される。

2海上七里あり　「曽良旅日記」には「海上四リ」とある。

3天屋なにがし　天屋五郎右衛門。敦賀の廻船問屋。室氏。俳号は玄流。「曽良旅日記」の八月十一日の条に「天や五郎右衛門」の名が見える。

3破籠　檜の白木で作られた折箱で、内側に仕切りがあり、ふたをかぶせて使う弁当箱。

3小竹筒　酒を入れる携帯用の竹筒。

4追ひ風ときの間に……　「ときの間」は時の間。舟に乗り、追い風を受けて短時間で浜辺に着いたことを、『源氏物語』の須磨巻で描かれた情景に重ねて表現している。この後の発句「寂しさや須磨にかちたる浜の秋」も『源氏物語』の須磨の浜辺を念頭において詠んでいる。

5法花寺　日蓮宗の寺、本隆寺のこと。

7須磨　『源氏物語』須磨巻に「須磨は、いとど心づくしの秋風に、海はすこし遠けれど、行平の中納言の、「関吹き越ゆる」と言ひけむ浦波、よるよるは、げに、いと近う聞えて、またなくあはれなるものは、かかる所の秋なりけり」とある。芭蕉はこれをふまえながら、秋の種の浜の「寂しさ」は須磨に「かちたる」（まさる）と詠んだ。

8波の間……　本隆寺に所蔵される「越前ふくゐ洞哉書」の懐紙（後掲「寺に残す」参照）に桃青（芭蕉）詠の「小萩ちれますほの小貝小盃」が記されている。「波の間や小貝にまじる萩の塵」はこの句の改案であるとする説と、二つの句を別の作品とする説とがあるが、ここでは前者の説に従った。「萩の塵」は萩の花が散った花びら。花屑。

9等栽　福井の俳人。生没年未詳。洞哉とも書く。

9寺に残す　本隆寺所蔵の懐紙に「気比の海　国の序、このはまにまうで侍る。同じ舟に　青／小萩ちれますほの小貝小盃／元禄二仲のけしきめで、いろの浜の色に移りて、　さそはれて、小貝を拾ひ、袂につゝみ、盃　秋」とある。「西上人」「彼上人」は西行のますほの小貝とよみ侍しは、西上人の形見　にうち入なんどして、彼上人のむかしをも　こと。成けらし。（中略）此たび武江芭蕉桃青巡　てはやす事になむ／越前ふくゐ洞哉書／桃

鑑賞

「種の浜」は、大きく二つの古典と響き合っている。ひとつは中世の和歌であり、もうひとつは『源氏物語』である。

まず、種の浜へ行ってますほの小貝を拾うという発想そのものが、西行の和歌「汐染むるますほの小貝拾ふとて色の浜とはいふにやあるらむ」に触発されたものだったと考えられる。

「天屋なにがしといふ者……僕あまた舟に取り乗せて」とあるように、種の浜への船旅には多くの従者が同行し、飲食物も十分に用意されていた。そのように実際には賑やかで贅沢な行楽であったと考えられるが、芭蕉はあくまで、種の浜の風景にわびしさと寂しさを見いだすことに集中している。貧弱な小さな家とわびしい寺ばかりがある浜辺で、小さな美しい貝を拾い、茶や酒を飲む。夕暮れになり、寂しさに心を動かされる。芭蕉のそうした心情の背景には、秋の夕暮れの寂しさを詠んだ『新古今和歌集』の三夕の歌、例えば藤原定家の「見渡せば花も紅葉もなかりけり浦の苫屋の秋の夕暮れ」（二六三ページ参照）などへの連想もあったのではなかろうか。

そして「追ひ風ときの間に…」の記述が『源氏物語』の須磨巻の表現をふまえていることから、芭蕉のなかには、目前にある秋の種の浜と、『源氏物語』で表現された秋の須磨とを対比する発想もあったと考えられる。それが「寂しさや」の句に端的に表れていると言えよう。

本隆寺所蔵の懐紙には、芭蕉と同行の人々が浜で小貝を拾い、酒を飲む盃にその貝を入れて興じていた様子が記されている（語句の研究「寺に残す」参照）。この懐紙の句「小萩ちれますほの小貝小盃」は、「小萩」「小貝」「小盃」と、小さく美しいものを連ねており、楽しげな酒宴の様子が想像される。これに対し、「種の浜」に記された「波の間や小貝にまじる萩の塵」の句は、浜に打ち寄せる波のあいだに貝と花屑が見えるという客観的な風景描写の句になっている。小貝と萩の花という句材は共通しているが、「小萩ちれ」の句がいわば動的であるのに対し、「波の間や」の句は静的である。ここにもまた、種の浜をわびしく寂しい場所として描こうとする指向があらわれていると言えよう。

《板書例》　種の浜の様子

十六日↓種の浜に舟を走す
目的＝ますほの小貝を拾う。
追ひ風ときの間に吹き着きぬ。
↓どのような状況か？

種の浜…海人の小家＋法花寺
↓わびしげな景色
←
夕暮れの寂しさ
↓感に堪へたり
★感に堪えない＝非常に感動すること。

寂しさや須磨にかちたる
　　勝ち
浜の秋
Q誰が誰に勝ったのか？

波の間や小貝にまじる萩の塵
Qどのようなイメージを持ったか？

深い学びのために

学習のポイントの解答例

1　**「寂しさや」の句について、「かちたる」とは、何が何に、どのような点で勝ったのか、まとめてみよう。**

【答】種の浜が須磨に、寂しさがつのる風情があるという点で勝った。

▼ポイント▲　種の浜を訪れた作者が、夕暮れの寂しさに感動している場面である。さらに、上五に「寂しさや」という表現があることから、主題は「寂しさ」であることがわかる。

言葉と表現の解答例

1　**「波の間や」の句について、「波」「小貝」「萩の塵」を取り合わせたことで、どのような効果が生まれているか、話し合ってみよう。**

【答】色彩の対比が鮮やかにイメージされる効果など。

▼ポイント▲　小貝や萩がどのようなものなのか、生徒たちが調べてみるところから始めるとよいだろう。萩の花が赤いことに気づくと、赤い花が波間に浮かぶ映像がイメージされ、さまざまな議論が展開されると思われる。

言語活動の解答例

1　**「ますほの小貝拾はんと」（一〇六・2）とあるが、作者はなぜこのようなことをしようとしたのか、話し合ってみよう。**

【答】（意図）「ますほの小貝を拾」うという行為をなぜ行ったのか、西行の歌を手掛かりに考えさせ、作品の読みを深めさせる。
（手順）
1　西行の和歌（一〇六・脚注2参照）を読み、現代語訳するなどして、歌に詠まれている内容を把握する。
2　芭蕉が西行をどのように思っていたのか、資料集などで調べる。
3　西行の歌と同じ行為を行った理由と、行うことによってどのような効果があるかについて、話し合う。
（ゴール）古人と同じ行為を追体験することで、自分の旅の感動を古人の事績や歴史的背景と重ねあわせ、多くの人（読者）と共有しようとしている作者の意図を読み取らせたい。

（小林　俊洋）

田舎に雅言の残れること（玉勝間）

本居宣長

要旨

田舎には昔の言葉が残っている。それらを広く集めるとおもしろい。肥後の人が「見える」を「見ゆる」などと言うので尋ねると、卑しいきこりなどはそう言い、気取った人は「見える」などと言うと答えた。どの国でも山村には古語が残るが、町は都の影響で現代風の言葉になっている。別の肥後の人が、今「ひきがえる」を「たんがく」と言うのは、古語「たにぐく」のなまりと推測したが、本当であろう。

構成

段落	ページ・行	段意
第一	初め～一〇八・６〈多からん。〉	田舎には古い時代の言葉が残っている。特に遠国の人の言葉はおもしろく、そういう言葉を広く集めると、どんなにか興味深いことだろう。
第二	一〇八・７〈近きころ〉～一〇九・３〈心得たるなめり。〉	肥後の人が「見える」を「見ゆる」などと言うので、優雅な言葉と思って尋ねると、卑しいきこりなどはそう言い、気取った人は「見える」などと言うと答えた。「見える」は現代風の言い方なのに、それをいいと思っているのであろう。
第三	一〇九・４〈いづれの国〉～一〇九・８〈ゆくめる。〉	どの国でも、卑しい者の言葉は、なまりながらも昔の言葉を伝えているが、町は都の人の影響を受けて現代風の卑しい言葉になっている。
第四	一〇九・９〈まことや〉～終わり	別の肥後の人が、今、肥後で「ひきがえる」を「たんがく」と言うのは、古語の「たにぐく」のなまりと推測したが、本当であろう。この類のこと、また触れよう。

品詞分解と現代語訳

（表示は略号で示した。略号については巻末参照。）

①すべて　田舎　に　は、　いにしへ　の　言　の　残れ　る　こと　多し。　②ことに　遠き　国人　の　言ふ　言　の　中　に　は、　おもしろき　ことども　ぞ　まじれ　る。　③おのれ　年ごろ　心　を　つけ　て、　遠き　国人　の　とぶらひ来　たる　に　は、　必ず　その　国　の　言葉　を　問ひ聞き　も　し、　その　人　の　言ふ　言　を　も、　心　とどめ　て　聞き　聞き集め　なば、　いかに　おもしろき　こと　多から　ん。　④近き　ころ、　肥後　の　国人　の　来　たる　が、　言ふ　こと　を　聞け　ば、　世　に　「見える」「聞こえる」　など　いふ　類ひ　を、　「見ゆる」「聞こゆる」　など　ぞ　言ふ　なる。　⑤これ　は　今

副　格助・場所　係助・区別　格助・体修　格助・主格　ラ四・已　存・体
副　形ク・終　副　形ク・体　格助・主格　八四・体　格助・体修　格助・場所
係助・区別　形ク・体　係助・強意(係)　ラ四・已　存・体(結)　代　格助・対象
格助・対象　カ下二・用　接助・単接　形ク・体　格助・主格　カ変・用　完・体　格助・対象
係助・区別　副　代　格助・体修　格助・体修　格助・対象　カ四・用　係助・同類　サ変・用
代　格助・体修　格助・主格　八四・体　格助・対象　係助・同類　マ下二・用　接助・単接　カ四・用
係助・同類　サ変・体　接助・逆確　副　形ク・体　形ク・未　推・体
マ下二・用　完・未　接助・順仮　副　格助・体修　格助・対象　形ク・用
形ク・体　④近き　ころ、　肥後　の　国人　の　来　たる　が、　言ふ　こと　を　聞け　ば、　世　に　「見える」「聞こえる」　など　いふ　類ひ　を、　「見ゆる」「聞こゆる」　など　ぞ　言ふ　なる。　⑤これ　は　今
格助・体修　格助・主格　カ変・用　完・体　格助・主格　八四・体　格助・対象　カ四・已　接助・順偶　格助・場所　副助・引用　係助・強意(係)　八四・終　定・体(結)　代　係助・提示
格助・対象　副助・引用　係助・強意(係)　八四・終　定・体(結)　代　係助・提示

①一般的に田舎には、昔の言葉が残っていることが多い。②特に（都から）遠く離れた国の人が話す言葉の中には、興味深いものが交じっている。③私は年来気をつけて、都から遠く離れた国の人が訪ねてきたときには、必ずその国の言葉について質問し、その人が話す言葉をも、心に留めて聞いたりもするが、さらに諸国の言葉を広く聞き集めたならば、どんなにおもしろいことが多いだろう。

④最近、肥後の国の人がやって来たが、その話すことを聞いていると、世間で「見える」「聞こえる」などという類いのことを、「見ゆる」「聞こゆる」などと言うようである。⑤これは今の世の中では絶えてしまって聞かれ

の　世に　は　絶え　て　聞こえ　ぬ、雅び　たる
格助・体修　格助・場所　係助・区別　ヤ下二・用　接助・単接　ヤ下二・未　打・体　バ上二・用　完・体

言葉遣ひ　なる　を、「その　国にて　は、なべて　かく　言ふ
断・体　接助・順理　代　格助・体修　格助・場所　係助・区別　副　副　八四・体

に　や。」　と　問ひ　けれ　ば、「ひたぶる　の　賤、山がつ
断・用　係助・疑問　格助・引用　八四・用　過・已　接助・順偶　形動ナリ・語幹　格助・体修

は　みな、『見ゆる』『聞こゆる』『さゆる』『たゆる』　など　やうに　言ふ
係助・区別　副助・例示　比・用　八四・体

を、少し　言葉　を　も　つくろふ　ほど　の　者　は、多く
接助・逆確　副　格助・対象　係助・同類　八四・体　格助・体修　係助・区別　副

『見える』『聞こえる』　と　やうに　言ふ　なり。」　と　ぞ
格助・引用　比・用　八四・体　断・終　格助・引用　係助・強意(係)

語り　ける。　⑥そ　は　なかなか　今　の　世　の　卑しき
ラ四・用　過・体(結)　代　係助・区別　副　格助・体修　格助・体修　形シク・体

言ひざま　なる　を、なべて　国々　の　人　の　言ふ　から、そ
断・体　接助・逆確　副　格助・体修　格助・主格　八四・体　接助・理由　代

を　よき　こと　と　心得　たる　な　めり。
格助・対象　形ク・体　格助・引用　ア下二・用　完・体　断・体(撥音(無表記))　定・終

⑦いづれ　の　国　にて　も、賤、山がつ　の　言ふ　言　は、
代　格助・体修　格助・場所　係助・同類　格助・主格　八四・体　係助・区別

よこなまり　ながら　も、多く　昔　の　言　を　言ひ伝へ　たる
ラ四・用　接助・逆接　係助・同類　副　格助・体修　格助・対象　八下二・用　存・体

を、人　しげく　にぎはしき　里　など　は、異国人　も
接助・逆確　形ク・用　形シク・体　副助・例示　係助・区別　係助・同類

ない、優雅な言葉遣いなので、「肥後の国では、一般的にこのように言うのでしょうか。」と質問したところ、「全く山中で生活する卑しい者はみな、『見ゆる』『聞こゆる』『さゆる』『たゆる』などのように言うが、少し言葉に気をかけるほどの者は、多くは『見える』『聞こえる』のように言うのです。」と話した。⑥それ（「見える」「聞こえる」など）はかえって今の世の中の俗な言い方なのであるが、ふつう諸国の人が（そう）言うことから、それをよいことと心得たようだ。

⑦いずれの国であっても、山に住む卑しい者が話す言葉は、なまりはあるが、多くは昔の言葉を言い伝えているが、人が密集してにぎわっている里などは、他国の人も入り交じり、都の人なども、折に触れて往来などするうち

入りまじり、都の人など も、ことに触れて来通ひ
ラ四・用　格助・体修　副詞・例示　係助・同類　副　ラ下二・用　接助・単接　八四・用

など する ほど に、おのづから ここかしこ の 言葉 を
副助・例示　サ変・体　格助・時間　副　代　格助・体修　格助・対象

聞きならひ て は、おのれ も 言選りし て、なまさかしき
八四・用　接助・単接　係助・強意　代　係助・同類　サ変・用　接助・単接　形シク・体

今やう に 移りやすく て、昔ざま に 遠く、なかなかに
格助・変化　形ク・用　接助・単接　格助・比基　形ク・用　副

卑しく なん なりもてゆく める。
形シク・用　係助・強意(係)　カ四・終　定・体(結)

⑧まこと や、同じ 肥後の国 の、また の 人 の 言へ
間助・呼掛　形シク・終　格助・同格　副　格助・体修　格助・主格　八四・已

る、「かの国にて、『ひきがへる』といふ ものを、『たんがく』と 言ふ なる は、いにしへ の 『たにぐく』 の よ
完・体　代　格助・体修　格助・場所　格助・引用　八四・体　断・体　係助・提示　格助・体修　格助・対象　格助・体修

こなまり なる べく おぼゆ。」と 語り し は、まことに しか
断・体　推・用　ヤ下二・終　格助・引用　ラ四・用　過・体　係助・提示　副

なる べし。⑨この 類ひ の こと、国々 に なほ 聞け
断・体　推・終　代　格助・体修　格助・場所　副　カ四・已

る こと 多かる を、今 は ふと 思ひ出で たる こと を
存・体　形ク・体　接助・逆確　係助・提示　副　夕下二・用　完・体　格助・対象

言ふ なり。⑩なほ 思ひ出で ん まま に、また も 言ふ べし。
八四・体　断・終　副　ダ下二・未　婉・体　格助・状態　副　係助・同類　八四・終　意・終

に、（そういう里の人々は）自然とあちらこちらの言葉を聞き習っては、自分も言葉を選んで、なまじ賢そうな現代風に移りやすく、昔風から遠くなり、かえって卑しくなっていくようだ。

⑧そうそう、同じ肥後の国の人で、別の人が言ったことだが、「その（肥後）の国で、『ひきがへる』というものを、『たんがく』と言うのだが、それは、昔の『たにぐく』のなまりであろうと思われる。」と話したのは、本当にそうであろう。⑨このようなことは、諸国でもっと聞いていることは多いが、今ふっと思い出したことを言うのである。⑩さらに思い出すままに、また言おう。

学習活動のポイント

■展開

学習活動のポイント

❶ 全文を音読する。思判表B(1)ア

❷ 重要古語の意味・用法を確認し、現代語訳する。知技(1)ウ エ・(2)ウ
→「言葉と表現」1・2

❸ 全体を要約し、作者の言う「雅びたる言葉遣ひ」とはどういうものかを考える。思判表B(1)イ
→「学習のポイント」1

❶論の展開に注意して、ゆっくり音読させる。

【評価】文章の種類を踏まえて、内容や構成、展開などについて叙述を基に的確に捉えているか、音読により、確認する。

❷補うところを括弧内に入れさせるなどして、訳はできるだけ正確を期させる。

【評価】我が国の言語文化に特徴的な語句の量を増し、それらの文化的背景について理解を深め、語感を磨き語彙を豊かにしているか、ペーパーテストにより、確認する。

・文章の意味は、文脈の中で形成されることを理解しているか、現代語訳により、確認する。

・古典の世界に親しむために、古典を読むために必要な文語のきまりや、古典特有の表現などについて理解しているか、ペーパーテストにより、確認する。

❸「見ゆる」などのように、古代の形を残している語を「雅びたる」と言っていることを読み取らせる。

【評価】作品や文章に表れているものの見方、感じ方、考え方を捉え、内容を解釈しているか、ノートにまとめさせることにより、確認する。

■まとめと発展

学習活動のポイント

❶ なぜ田舎には古語が残っているのか、また、それがどのように新しい言葉に置き換えられていくのかを考える。知技(1) ア・(2)エ 主態
→「言語活動」1

❶都会で使っていることばなどを聞いて、その方が良いと思い古い言葉を捨ててしまうということは、現代日本語でも同様のことが起こっていることを考えさせる。

【評価】言葉には、文化の継承、発展、創造を支える働きがあることを理解しているか、確認する。

・時間の経過や地域の文化的特徴などによる文字や言葉の変化について理解を深め、古典の言葉と現代の言葉とのつながりについて理解しているか、確認する。
・進んで時間の経過や地域による言葉の変化についての作者の考察を理解し、学習課題に沿って、作者の地方に残る言葉に対する感じ方・考え方についてどのように思うかを話し合っているか、分析する。

指導上の注意点と発問例

●一〇八ページ

問 **「おもしろきことども」（3行目）とは、どのようなことを指すか、本文中から抜き出せ。**

答 「いにしへの言」（2行目）

問 **「国々の言葉どもをあまねく…多からん」（5行目）と述べるのはなぜか。**

答 諸国の方言から、昔の言葉がどのようなものであったかを知ることができるから。

問 **「雅びたる言葉遣ひ」（9行目）と反対の意味を示す言葉を本文中から十字程度で抜き出せ。**

答 「今の世の卑しき言ひざま」（一〇九・2行目）

問 **◉「少し言葉をもつくろふほどの者」（11行目）とは、どのような場所に暮らす人々か。**

答 様々な国の人が行き交い、密集してにぎわっている里に住む人々。

補 「つくろふ」は、体裁を考えて取り繕う意。「ほど」は身分・生活環境の範囲などの程度を表す。「ひたぶるの賤、山がつ」に対する人で、田舎弁で話すことを嫌い、現代風の言葉を使おうとする者である。

●一〇九ページ

問 **「そをよきことと」（2行目）の「そ」は**推定の助動詞の連体形。上の係助詞「ぞ」を受けて連体形で結ぶ。肥後の国の人が発音して聞き取ったことを基にして推定している気持ちを表している。

8こは 「これは」。「こ」は「見ゆる」「聞こゆる」を指す。

10ひたぶるの 全くの。

10賤、山がつ 賤は「卑しい」、山がつは猟師やきこりなど、「山中で生活する者」の意。「しづが山がつ」とも言う。

11さゆる 「冴える」。下二段活用動詞「さゆ」の連体形。

11たゆる 「絶える」。下二段活用動詞「たゆ」の連体形。

●一〇九ページ

1そは 「それは」。「そ」は「見える」「聞こえる」を指す。

4よこなまりながらも 「（言葉や発音を崩して）なまりはあるが」。「よこなまり」は、ここでは ラ行四段活用動詞連用形であることに注意。「よこ」は「なまり」に不正の意を添える。

5言ひ伝へたるを 「言い伝えているが」。「たる」は存続の助動詞「たり」の連体形。「を」は逆接の接続助詞。

6ことに触れて…… 折に触れて、機会があ

語句の研究

●一〇八ページ

1雅言 優雅な言葉。宣長は「見ゆる」「聞こゆる」などを「今の世には絶えて聞こえぬ、雅びたる言葉遣ひ」としている。

2遠き国人 田舎（都から離れた地方）のなかでも、とりわけ遠い地方の人。

5なほ国々の言葉どもを 「さらに諸国の言葉を」。「ども」は複数を表す接尾語。諸国の言葉とは、それぞれの地方で使われている方言のこと。

7肥後の国人 肥後は現在の熊本県。ここでは「遠き国人」の例としてとらえられる。

7来たるが 「が」は、単に上の句と下の句とを結び付ける接続助詞。

7世に「見える」「聞こえる」… 「見える」「聞こえる」は、ともに下一段活用の動詞。「見ゆる」「聞こゆる」は、ともにヤ行下二段活用の動詞「見ゆ」「聞こゆ」の連体形。宣長を取り巻く環境では、本来は下二段活用の動詞が、下一段化していたのである。一方の肥後の国では、連体形で止めることはあるものの、まだ、下二段活用が残っているのである。

8言ふなる 「言うようである」。「なる」は

どのようなことであるか。

答 「見ゆる」「聞こゆる」などという言葉を「見える」「聞こえる」と言うこと。

問 **「人しげくにぎははしき里など」（5行目）では、人々の話す言葉はどのようなものになるか、その理由もあわせて述べよ。**

答 様々な国の人の言葉が交わされる場所であるために、そのような里に住む人は、中途半端に賢そうな現代風の言葉を選んで話すようになり、昔の雅びな言葉とはかけ離れた卑しい言葉になる。

問 **「まことにしかなるべし。」（11行目）の「しか」はどのようなことを指すか、説明せよ。**

答 肥後国の人が「ひきがえる」のことを「たんがく」と言うのは、かつて「ひきがえる」を「たにぐく」と言っていて、それが訛ったものであるということ。

問 **◉「この類ひのこと」（11行目）とは、どのようなことを指しているか。**

答 肥後の国で「ひきがえる」のことを「たんがく」と言うが、これは「ひきがえる」の古語「たにぐく」がなまって伝えられたものと考えられるように、古語もしくは古語のなまりを伝えていると分かるような言葉のこと。

ることに行ったり来たりするうちに。ここでは、多様な地域からの人々の往来が、多様なことばの往来でもあることを述べている。

7言選り　言葉を選ぶこと。ここでは、あちこちの言葉を聞き覚え、自分でも言葉を選んで使うことを言っている。

7なまさかしき今やう　「なまさかしき」の「なま」は「中途半端に」の意。「さかし」は才知があり賢いという意味と、小ざかしいという意味がある。ここでは後者と解する。「今やう」（今様）は今の世、あるいは今風・現代風の意。後に出てくる「昔ざま」に対する語。

9まことや　「ああ、そうそう」。物事を思い出すときに発する言葉。「や」は感動を表す終助詞。

10たにぐく　ひきがえるの古語。「ここに多迩具久（タニグク）まをしつらく」（「古事記」上）、「山彦の　応へむ極み　谷潜（たにぐく）の　さ渡る極み」（「万葉集」巻六）など上代文献に出てくる語。「たにくぐり」から発生したという語源説がある。

10よこなまりなるべくおぼゆ　「なまりだろうと思われる」。「よこなまり」は、ここでは四段活用動詞の連用形が名詞化したもので、動詞ではない。「なる」は断定の助動詞の連体形。「べく」は推量の助動詞の連用形。

鑑賞

本章は言葉の問題を述べている一条である。言葉は時代とともに変化していく。その変化ということについてなら、早くに兼好法師が「徒然草」二十二段で、何事も古き世が慕わしいと主張し、その例として、古くは「車もたげよ」と言ったのを今は「もてあげよ」と言うなどと、言葉の変化を取り上げている。また、地方によって使用する言葉の違いがあるということを認識するという、いわゆる方言のことに関しては、貞門俳人の安原貞室が「かたこと」で、京都と田舎との対比という大まかなものではあるものの、言葉を正す意識のもとで違いを指摘している。宣長の時代には、俳人の越谷吾山が安永四（一七七五）年に「物類称呼」を出版している。「部門別に配列した全国方言辞書」（「日本古典文学大辞典」）と、現在でも高く評価されている、本格的な方言の本なのである。

ところが、宣長は、言葉の変化と方言とを結び付けるという新しい見解を打ち出した。古い時代の優雅な言葉が、若干の違いはあっても地方に残っていて、そういう言葉を広く採集するとおもしろいとまで述べている。古文献を熟読し、古語について卓越した識見を有する宣長なればこその発言であるが、書物にまとめるまでには至らなかったようである。

本章では、地方の言葉が内包するおもしろさを披瀝しているだけであるが、実は習俗・儀礼などでも、言葉と同様に地方に古いものが伝えられていると考えていた（「玉勝間」八の巻「田舎に古へのわざの残れること」）。こうなると、近代以降に発達した柳田国男の民俗学との間に大した距離はない。残念なことに、こうした学問は宣長の中では発展しなかったが、方言の問題といい、その発想の新しさに驚かされる。参考までに「田舎に古へのわざの残れること」の本文を次に掲げる。

参考

詞のみにもあらず、よろづのしわざにも、かたゐなかには、いにしへざまの、みやびたることの、のこれるたぐひ多し。さるを例のなまさかしき心ある者の、立ちまじりては、かへりてをこがましくおぼえて、あらたむるから、いづこにも、やうやうにふるき事のうせゆくは、いとくちをしきわざ也。葬礼（はふりわざ）・婚礼（とつぎわざ）など、ことに田舎には、ふるくおもしろきこと多し。すべてかかるたぐひの事共をも、国々のやうを、海づら山がくれの里里まで、あまねく尋ね、聞きあつめて、物にもしるしおかまほしきわざ也。葬（はふり）・祭などのわざ、後の世の物しり人の、考へ定めたるは、中々にからごころのさかしらのみ、多くまじりて、ふさはしからず、うるさしかし。

《板書例》

今の世の言葉　　肥後の国の言葉→いにしへの言葉

雅びたる言葉

見える　　見ゆる

聞こえる　　聞こゆる

かの国　　肥後の国

ひきがへる　　たんがく（たにぐく）

深い学びのために

1 次の傍線部の助動詞の意味の違いを、それぞれ確認してみよう。

(1)　「見ゆる」「聞こゆる」などぞ言ふなる。（一〇八・9）

(2)　こは今の世には絶えて聞こえぬ、雅びたる言葉遣ひなるを（一〇八・8～9）

学習のポイントの解答例

【答】 (1)推定　(2)断定

▼ポイント▲　助動詞「なり」は、伝聞・推定の助動詞ならば終止形に接続し、断定の助動詞ならば体言または連体形に接続するため、意味の違いは、まずは接続から確認するのが望ましい。ただし、(1)の「言ふ」のように、接続する対象の語が四段活用動詞の場合は終止形と連体形の区別がないので、前後の文脈などから判断する必要がある。ここでは、作者が土地の人から聞いた話から判断した内容であるので、推定と解釈する。(2)は、「言葉遣ひ」という名詞に接続しているので、断定の助動詞である。

2 次の部分を、傍線部の語に注意して、それぞれ現代語訳してみよう。

(1)　あまねく聞き集めなば（一〇八・5）

(2)　そをよきことと心得たるなめり。（一〇九・2～3）

1 本文では、「見える」「聞こえる」に対して、「見ゆる」「聞こゆる」のほうを「雅びたる言葉遣ひ」（一〇八・9）だと言っているが、その理由をまとめてみよう。

学習のポイントの解答例

【答】「見ゆる」「聞こゆる」は中古・中世文学などに頻繁に出てくる古語であるのに対して、「見える」「聞こえる」は宣長時代に使用されている言葉ではあるものの、古い文献には、見当たらないものだから。

▼ポイント▲　「見ゆる」「聞こゆる」について言及した箇所では文献に関して全く触れていないが、宣長は当然よく読んで知っていたであろうことは疑い得ない。「ひきがえる」の場合は肥後の国の人が話してはいるが、宣長も「万葉集」などの例を思い浮かべているのである。なお、下二段活用の動詞の下一段化は室町時代後期には現れ、江戸時代には、かなり一般的になっていた。

言葉と表現の解答例

【答】⑴広く聞き集めたならば　⑵それをよいことと心得たようだ。

▼ポイント▲　⑴の傍線部「な」は完了の助動詞「ぬ」の未然形。さらに、「ば」に接続しているので、「未然形＋ば」の形であり、順接の仮定条件の訳となる。⑵の傍線部「な」は、断定の助動詞「なり」の連体形の撥音便化で、撥音無表記となっているもの。「めり」は推定の助動詞。「な」の直前の「たる」は完了の助動詞。

言語活動の解答例

1　**作者の、地方の言葉に対する感じ方・考え方についてどのように思うか、話し合ってみよう。**

【答】（省略）

▼ポイント▲　文化は先進地域から後進地域へという一般的な流れを考えて見るとよく理解できよう。日本の場合は、なんと言っても京都に文化の中心があり、江戸時代になってから、江戸・大阪も文化的に発展したが、ともかく人の密集する大都会である。地方にも、城下町があって、都市は形成されるが、文化は大都会から流れていき、大きな影響を受ける。ところが、地方でも人の往来のあまりない、先進文化との交流のない地域では、昔から伝えられている文化が残されているというわけである。現代における方言、あるいは民俗学なども紹介して、生徒に活発な意見を求めたい。同時に、言葉が古代から次第に変化していったということに着目して、現代語の言葉の乱れ（例えば、「知られる」とあるべきところを「知れる」とするような類）と関連させるのもおもしろい。

（小林　俊洋）

単元の言語活動７

歴史を再発見し、随筆を書く

活動のねらい

単元７の教材は、いずれも「歴史とのつながり」という観点に基づいて考えを深めることができる。過去の出来事や事跡を、現代を生きる私たちがどのように受け止め、新たな発見をしていくことができるのか、生徒達に考えを深めてもらうための教材として位置づけることができよう。

今回の課題では、歴史を再発見することの意義、ひいては、古典の作品が現代に至るまで先人達によって伝えられてきたことの意義について、生徒に考えてもらうことを目的とする。

現代の視点から歴史を見つめる際、それは過去の歴史をあるがままの姿で再現しようとするのではなく、時に美化したり、大げさに描写したりするなど、しばしば「作為的」な改変がなされるのではないだろうか。たとえば、『おくのほそ道』「平泉」の文章には、引用や技巧を駆使した表現が散見され、それらは時に事実とは異なる「作為的」な描写にすらなる。例えば、義経主従の功名一時のむなしさ、藤原三代の栄耀のはかなさに強い感動を覚えた芭蕉は、「時の移るまで泪を落し侍りぬ」と記しているのだが、一方で『曾良旅日記』の叙述を調べてみると、実際の平泉滞在は数時間に過ぎなかったと記録されており、「時の移るまで」という表現はいささか大仰であるといえよう（竹下義人「過去との対話『おくのほそ道』」『〈新しい作品論〉へ、〈新しい教材論〉へ 古典編4』二〇〇三年、右文書院）。また、「夏草や兵どもが夢の跡」の「夏草」についても、杜甫の詩を援用した「国破れて山河あり、城春にして草青みたり」、あるいは「功名一時の叢となる」などといった表現から導き出された描写であり、芭蕉が実際に見た印象を忠実に再現したものとは限らない。つまり、「平泉」の文章は、芭蕉の感動がその場で即時的に結晶化したものではなく、長い時間をかけて推敲を重ねた末に生み出された「作為的」な表現だと考えられるのである。

では、自分が見たままの感動的な風景を再現するのではなく、事実とは異なる「作為的」な表現を生み出すことに一体どのような意味があるのだろうか。恐らく、自己の体験や感動を多くの人々と共有したいと願うとき、体験や感動を忠実に再現するのではなく、それまでに蓄積された知識や表現に依拠することがあるのではないだろうか。旅という極めて個人的な体験の中で眼にした風景への感動を多くの人々と共有するために、奥州藤原氏をめぐる激戦の地という歴史的背景が示されることで、実際の風景を眼にしていない人々にも荒涼とした古戦場の情景がリアルに想像されるのである。

夏草の生い茂った何の変哲もない荒野の風景が、歴史的背景を知ることで一変し、新しい見方が生まれてくるという点について、生徒に説明することができるのではないだろうか。歴史的知識を背景に据えながら過去の表現に寄り添うという行為には、風景への感動をより多くの人と共有するための機能があるのだろう。こうした表現の「作為性」は、多くの人々の想像力を喚起し、感動を共有するためのテクニックとして理解することができるのではないだろうか。

タイトル・序文の解説

「歴史を再発見」するという表現は、前述の通り、過去の歴史的な出来事や事跡を、現在においてどのように継承しながら、新しい発見をすることができるのか、考えを深めてもらいたいという意図によるものだ。

また、発見したことをどのように表現するか、という点についても、生徒達に関心を持ってほしいと考える。そのため、内容を比較的自由にまとめることができる随筆という形式でまとめるという課題を設定した。

「課題」の解説

課題　関心を持った古跡や伝統行事を題材として、随筆を書いてみよう。

前述の通り、生徒達が過去の歴史の意義を現代の側から再発見することの面白さを知ってもらうことが、この単元の最大の狙いであるが、具体的な課題としては、生徒達に関心のある古跡や伝統行事について調査してもらうという作業を設定した。

歴史に関心のある生徒は、各自の興味に沿って調査を進めてもらえればよいのだが、あまり歴史に関心の無い生徒達には、住んでいる地域の古跡や伝統行事について調べるという方向性についても場合によってはアドバイスし、聞き取り調査も含めた様々な方法論を紹介してもよいだろう。『玉勝間』「田舎に雅言の残ること」とも関連させながら、フィールドワークの方法論や魅力などについても考えを深めてもらいたい。

「活動」の解説

1　古跡や伝統行事に関する体験談や知識について話し合ってみよう。　知技(1)ア

①　グループを作り、旅行などで古跡を訪れたり、地域の伝統行事に参加したりしたときの体験について話し合う。

②　実体験以外にも、古跡や地域の伝統行事について知っている事例があれば、互いに教え合う。

2　古跡や伝統行事を一つ選び、グループで調査してみよう。　思判表A(1)ア

①　グループで話し合った古跡や伝統行事の事例の中から一つを選び、その歴史的背景を調べる。

・古跡の場合は、その場所で起きた歴史的な出来事や事件、現在の様子について調べる。
・伝統行事の場合は、起源、現在までの継承の過程や方法などについて調べる。
・書籍だけではなく、写真資料やパンフレット、インターネットなどを活用する。
・古跡の保存や再現、伝統行事の継承事業に関わっている人からの聞き取り調査などを行ってもよい。

②　調査の成果をまとめる。

3　各自で、随筆を書いてみよう。

思判表A(1)イ

①　2の調査をもとに下書きをする。

・調査したことをわかりやすくまとめる。最初から整った文章を書こうとするのではなく、箇条書きから始めてもよい。
・なぜそのテーマを選んだのかが分かるように、動機やきっかけを書く。
・調査の前と後で、どのように見方が変わったのかなどを書く。

②　推敲する。

・タイトルを工夫する。読み手の興味を引くような言葉を選ぶ。倒置法、体言止めなどの修辞を用いてもよい。
・文章の構成を工夫する。もっとも伝えたいことを文章のどこに配置するのが効果的かを考える。
・文体を工夫する。ですます体か、である体か、自分の伝えたいことに合う文体を選ぶ。

③　清書する。

・誤字脱字がないか、文体は一致しているか、確かめる。
・全文を通読して、自分の伝えたいことが表現できているか、確かめる。

④完成した文章をグループ内で読み合う。

主態

・文章表現に関してよかったと感じた点や、内容面について特に関心を持った点などを話し合う。

一定の分量の文章をまとめることが難しい場合には、活用の内容を若干変更してもよいだろう。「昔の事跡について調べ、現在の状況との違い」をまとめたうえで、「現在に至るまでにどのような変化があったか」「その変化について知ることで、どのような感想を抱いたか」という点を議論してもよいだろう。

非常に難しい課題であるので、生徒の関心や状況に合わせて、負担感が大きくなりすぎないように調整する必要があるだろう。

評価規準

〔知識・技能〕⑴ア　言葉には、文化の継承、発展、創造を支える働きがあることを理解している。
〔思考力・判断力・表現力等〕A⑴ア「書くこと」において、自分の知識や体験の中から適切な題材を決め、集めた材料のよさや味わいを吟味して、表現したいことを明確にしている。
〔思考力・判断力・表現力等〕A⑴イ「書くこと」において、自分の体験や思いが効果的に伝わるよう、文章の種類、構成、展開や、文体、描写、語句などの表現の仕方を工夫しているか、確認する。
〔主体的に学習に取り組む態度〕進んで時間の経過や地域による言葉の変化について理解し、古典を踏まえた表現など、作者の工夫を読み味わい、今までの学習を生かして、関心を持った古跡や伝統行事を題材とし、自分の体験や思いが効果的に伝わるよう、構成、展開や、文体、描写、語句などの表現の仕方を工夫して、随筆を書こうとしている。

◎学習指導要領の言語活動例との関連
〔思考力・判断力・表現力等〕A⑵ア

（小林　俊洋）